

こおりもと
市原市郡本遺跡 (第2次)

1 9 9 5

日本電信電話株式会社 千葉設備建設センター
財団法人 市原市文化財センター

序 文

王賜銘鉄剣や上総国分寺跡に代表されますように市原市は埋蔵文化財の宝庫となっております。

このような歴史的に貴重な環境の中で、市原市文化財センターは、昭和57年の発足以来、埋蔵文化財の調査研究を中心とする事業を実施して今日に到っております。特に開発を前提とした緊急調査は、受託事業の九割以上を占め、遺跡の記録保存における発掘調査の内容の充実がよりいっそう求められております。

今回の調査も、電気通信設備建設に伴って実施した緊急調査でした。郡本遺跡は、周知の遺跡として市原郡家推定地に比定され、付近の郡本八幡神社参道前には、大型建物の礎石と考えられる大きな石が置かれており、特に遺跡の重要性が注目されておりました。

調査の結果、狭い範囲の発掘にもかかわらず、弥生時代後期や奈良、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑墓などが多数発見されました。この調査によっても、市原郡家の位置を確定する資料は得られませんでした。以上のような遺構等の発見は、よりいっそう郡本遺跡の重要性、特殊性を再確認する機会となりました。

本書は、これらの成果を記載したのですが、少しでも市原の歴史解明に、さらには、市原郡家等官衙研究の資料に役立つことが出来れば幸いです。

さいごに、調査に際しまして、多大なご協力とご指導をいただきました委託者の日本電信電話株式会社千葉設備建設センターの皆様、地主の岡本功氏、地元町会の田中和夫、岡本武氏並びに、千葉県教育委員会文化課及び市原市教育委員会に深く感謝の意を表します。

平成7年3月31日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 佐野年男

例 言

1. 本書は、千葉県市原市郡本における電気通信設備建設事業に先行して実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 遺跡は、「郡本遺跡」と呼称し、今回の調査地は、千葉県市原市郡本3丁目202番地の1に所在する。
3. 発掘調査は、日本電信電話株式会社千葉設備建設センターの委託により、千葉県教育委員会と市原市教育委員会の指導のもとに財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査対象面積は、267.47m²である。
5. 現地発掘調査と整理作業及び報告書刊行は次のように行った。
 現地発掘調査（確認、本調査）平成6年9月19日～同年11月4日 担当者 田所真・田中清美
 整理作業、報告書刊行 平成6年11月5日～平成7年3月31日 担当者 田中清美
 当報告書の執筆編集は、田中清美が行った。また、出土遺物の実測図については、一部を田所真氏が行っている。
6. 調査した記録類（図面・写真）と出土遺物は、市原市埋蔵文化財調査センターで保管している。
7. 今回の調査コード（市原市文化財センター）は、「セ188」である。

例 凡

1. 本書に使用した地形図は、昭和55年作成の市原市地形図1/2500 C-5、D-5他を使用した。
2. 方位は、座標北を使用している。（第3図調査区全体図参照）
3. 本書に示した遺構図は、1/60縮尺、遺物は1/6縮尺を基本として掲載した。
4. 竪穴床面の1点鎖線は、踏み固められた範囲、土器実測図の中心線で1点鎖線は反転させたことを示し、各々の破線は推定線を表わしている。また、スクリーントーンにより、焼土（No.1200）、炭（No.320）、粘土（No.31）、赤彩（No.31）、柱の当たり痕跡（No.415）を区別表現している。

調 査 組 織 （財団法人市原市文化財センター）

平成6年度役員名簿

職 名	役 職 名	氏 名	備 考
理事長	専任	佐野年男	
副理事長	市原市教育委員会生涯学習部長	山口唯一	
常務理事	専任	鈴木太郎	
理事	國學院大學教授	加藤晋平	
理事	和洋女子大学教授	寺村光晴	
理事	郷土史家	木村千春	
理事	市原市教育委員会教育長	植草久善	6. 7. 14逝去まで
		大野 皎	6. 9. 19より
理事	市原市企画部長	石井作二	
理事	市原市総務部長	加瀬睦郎	
理事	市原市都市計画部長	田中俊夫	
監事	市原市出納室長	斎藤初男	
監事	市原市教育委員会総務課長	田邊義夫	

平成6年度職員名簿

所 属	職 名	氏 名	備 考
庶務課	課長	古宮祐助	
	主事	大鐘光江	
	主事	阿部茂之	
調査課	課長	米田耕之助	
	係長	田中清美	
	主任調査研究員	大村直	
	主任調査研究員	小出紳夫	
	主任調査研究員	田所真	
	調査研究員	忍澤成規	
	調査研究員	小川浩一	
	調査研究員	櫻井敦史	
	調査研究員(囑託)	半田堅三	
	主事	高浦貞子	

目 次

本文目次

序 文

例言・凡例・調査組織

目 次

1. 遺跡の位置と環境及び調査経緯	1
2. 検出した遺構と遺物	3
3. まとめ	27
抄 録	

挿図目次

第1図 郡本遺跡の位置と周辺の主な遺跡	2	第11図 7～15、16号土坑実測図	19
第2図 調査地区周辺の地形図	5	第12図 1、2号掘立柱建物跡実測図	20
第3図 調査地区全体図	5	第13図 1、6～9、15号竪穴住居跡出土遺物実測図	21
第4図 1号竪穴住居跡実測図	12	第14図 11～13号	22
第5図 1、2、3号竪穴住居跡実測図	13	第15図 14、10号	23
第6図 4、5、7号竪穴住居跡実測図	14	第16図 16号	24
第7図 11号竪穴住居跡実測図	15	第17図 17号竪穴住居跡、11号土坑	25
第8図 6、12、13、14号竪穴住居跡実測図	16	第18図 1、2、6、10、14号土坑	26
第9図 8、9、10、15、17号竪穴住居跡実測図	17	第19図 その他の出土遺物、1、2号土坑 11、15号竪穴住居跡、出土遺物実測図	26
第10図 16号竪穴住居跡、1～6号土坑実測図	18	第20図 昭和61年調査(第1次)全体図 及び7号の主な出土遺物	28

表目次

第1表 新旧遺構番号一覧表	4	第6表 出土遺物表(4)	10
第2表 遺構表	4	第7表 出土遺物表(5)	11
第3表 出土遺物表(1)	7	第8表 遺物実測図の遺構対照表	6
第4表 出土遺物表(2)	8		
第5表 出土遺物表(3)	9		

写真図版目次

図版1	31	図版6	36
図版2	32	図版7	37
図版3	33		
図版4	34		
図版5	35		

1. 遺跡の位置と環境及び調査経緯

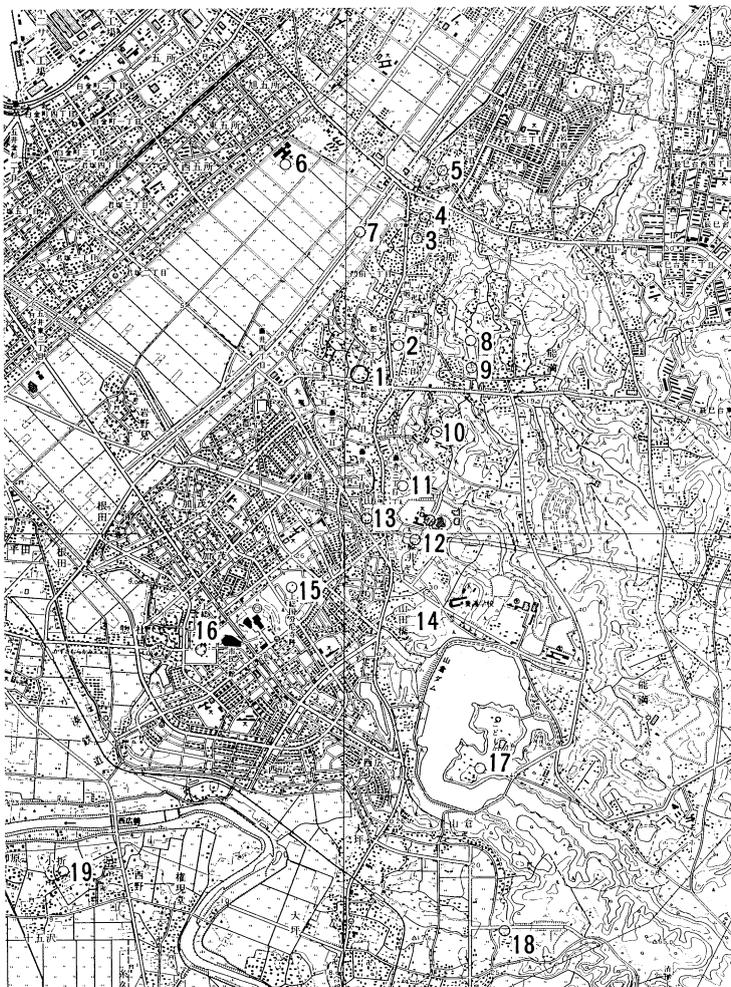
郡本遺跡は、房総半島の東京湾旧汀線より約3km東の内陸に入った通称「市原台地」といわれる洪積台地上に所在する。立地する台地は、西に東京湾の沖積地を望み、北西側から2つの小谷が入り込み、舌状に突出した形体を呈している。調査した地区は、標高約22mのほぼ台地の中央部付近である。周辺の遺跡では、縄文時代中期～後期の門前貝塚が東約800mに所在し、弥生時代中期の人面土器を出土した三嶋台遺跡は、同台地の北西約300mに位置する。また、後期の集落跡である唐崎台遺跡が南東約500mに存在し、住居跡が68軒検出されている。南側約500mには、郡本大宮遺跡が存在し、古墳時代後期の住居跡38軒、奈良～平安時代の住居跡35軒、土師窯などが調査されている。さらに約1km南南東には、上総国分寺の創建瓦と同範の文様をもつ千草山廃寺及び古墳時代後期から平安時代にいたる集落跡である千草山遺跡がある。同じく南約1kmには、二千数百片の緑釉陶器片を出土し、60数棟の掘立柱建物跡を検出した官衙的色彩の強い稲荷台遺跡が存在する。北側では、市原郡寺といわれる光善寺廃寺が約1kmに位置し、上総国府推定地の1つである古甲遺跡が北東にあり、先の調査により大溝や掘立柱建物跡などが検出されている。また、南側の大塚台遺跡方面から、当遺跡の東側を通り、北側の市原条里遺跡、五所四反田遺跡に続く幅6m程の古道跡が存在している。さらに中世頃では、藤井地区の泉水氏が持っていたといわれる懸仏が有り、その銘に「守公神御正躰 所者上総国府中国庁 国御目代日高禪正朝光沙弥道光 金資弘覚大勧沙門 応永九年六月一日」とあり、中世の国府の所在を暗示する資料となっているが、現在はこの懸仏の所在は不明である。釈蔵院のある台地は、大規模な土塁や堀などをもつ能満城が存在し、同地区の府中日吉神社本殿は室町期の建造物である。また、当遺跡の小谷を挟んで北側一帯は市原城といわれ、曲輪や土塁の痕跡が残る。北側約300mの多聞寺には南北朝末期といわれる五輪塔が存在する。当遺跡も周知の遺跡として、郡本八幡神社参道前に置かれている礎石とみられる大石や「郡本」という字名などから市原郡家推定地として比定されていた。昭和61年に今回の調査地区の約100m西側を約360㎡調査した際に弥生時代後期4軒、古墳時代後期1軒、奈良～平安時代3軒の住居跡が検出され、7号遺構（住居跡）からは、金銅製帯金具、墨書土器、線刻土器が、9号遺構（住居跡）からは、「吉」や「丈」?などの線刻土器が出土している。

今回の調査は、日本電信電話株式会社千葉設備建設センター所長佐々木隆美より平成5年12月22日付けで埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会が提出され、それを受けて、市原市教育委員会ふるさと文化課が現地踏査等を実施した結果、平成6年1月18日付けで包蔵地1ヶ所の回答がなされた。回答により協議の結果、緊急調査による記録保存を講じることになり、平成6年9月19日より財団法人市原市文化財センターの受託事業として実施するに到った。調査前の遺跡は、畑として利用され、調査直前は、雑草が茂っていた。また、西側は、北側の小谷から台地に登る道が小さな切り通しをつくっていた。現地調査は、本調査前に10%の確認トレンチ（2×4m）を設定している（担当田所真）。本調査は、全面的に重機により耕作土（表土）を剥がし、プランを確認した後、遺構別に調査した。実測の基準点は、座標軸を用いた。図面は、縮尺1/10～1/20で作成した。写真は、ブロー版（6×7版）と35ミリ版のスライドと白黒フィルムを記録している。

註1.「市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－」1988、市原市教育委員会

2.「口絵人面土器解説」須田勉『古代59、60合併号』1976、早稲田大学考古学会

3. 「唐崎台」鈴木英啓、田中清美、1981、唐崎台遺跡調査団
4. 「4. 郡本大宮遺跡」浅利幸一、1989『第5回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』
5. 「市原市千草山遺跡発掘調査報告書」1980、千草山遺跡発掘調査団
「千草山遺跡東千草山遺跡」田中清美他、1989、(財)市原市文化財センター
「市原市上総国府関係遺跡」平野元三郎、1964『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会
6. 「稻荷台遺跡の調査」浅利幸一他、1980『上総国分寺台調査概報』市原市教育委員会
「市原市稻荷台遺跡」浅利幸一、1987『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
7. 「上総光善寺廃寺」大川清、1957 古代24号
「企画展房総の古瓦」千葉県立房総風土記の丘、1978
8. 「上総国府推定地確認調査の現状」高橋康男 『特別講演会 まぼろしの上総国府をもとめてー講演会資料ー』
市原市教育委員会、1993
9. 「山田橋表通遺跡」近藤敏 市原市文化財センター年報昭和60年度、1986
「3. 山田橋大塚台遺跡」半田堅三『第9回市原市文化財センター遺跡発表会要旨平成5年度』1994など
10. 「市原条里制遺跡検出の古道跡について」大谷弘幸 『第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』1989
11. 「五所四反田遺跡」近藤敏 同上
12. 「中世の上総国府」石井進、資料以下註8と同じ
「日本金石文の研究」篠崎四郎 P179 1980 柏書房
13. 「府中日吉神社本殿修理工事報告書」瀧本平八他、1987、市原市教育委員会
14. 「日本城郭大系6(千葉・神奈川)」鈴木英啓他、1980、新人物往来社
15. 「市原の歴史と文化財」田中喜作、1983、市原市教育委員会



第1図 郡本遺跡の位置と周辺の主な遺跡 縮尺 1/50,000

16. 註1と同じ、この他に各種文献有り。
17. 「郡本遺跡」木對和紀、1987、(財)市原市文化財センター

凡例

1. 郡本遺跡
2. 古甲遺跡
3. 光善寺廃寺跡
4. 市原城跡
5. 白船城跡
6. 五所四反田遺跡
7. 市原条里遺跡
8. 能満城跡
9. 府中日吉神社
10. 唐崎台遺跡
11. 郡本大宮遺跡
12. 千草山遺跡、千草山廃寺跡
13. 稻荷台遺跡
14. 表道遺跡、大塚台遺跡他
15. 上総国分尼寺跡
16. 上総国分僧寺跡
17. 孟地遺跡
18. 池ノ谷遺跡
19. 海上郡衙推定地

2. 検出した遺構と遺物

調査の結果、狭い範囲ではあったが多くの遺構が重複して存在し、また、全掘できた遺構は少ない。主な遺構は、17軒分の竪穴住居跡、2棟分の掘立柱建物跡、16基の土坑等である。なお、昭和61年の調査と区別するため、今回の調査は「(第2次)」として、遺構名を遺構別に「竪穴住居跡」等の名称を呼称し、番号を付している。各遺構の規模等については、第2表遺構表を参照されたい。本項では、各遺構の特徴を述べたい。

竪穴住居跡では、1号が調査区の南側に位置し、2号・3号を切っている。弥生時代の遺構としては唯一全掘している。3軒のうち最も床面のレベルが低い。床面付近に焼土や炭粒を多く検出し、出土遺物は小片のみである。おそらく竪穴を廃棄直後に焼却処理したと考えられる。床面積は約8.8m²(竪穴下端内)である。2号は炉が地床炉で一部攪乱されているが、周囲に粘土が貼られており特異な形体を呈する。また、土層観察により3号を切っている。3号は、最も床面のレベルが高く、残存状況が悪い。2号・3号とも伴出遺物は無い。4号は、調査区の南西側に位置し、プランの南側大半は千葉県文化財センターが調査を実施し、2本の支柱穴と炉を検出しており、今回は、北東側の柱穴1本を調査したのみである。残存状況が悪く、床面や壁の立ち上がりも不明確であった。5号も南東隅に位置し、土坑に切られ、検出状態は良くない。床面の一部と炉が存在した。竪穴の掘り込みは浅い。6号住居跡は、調査地区の中央付近に位置するが、プランの南側一部しか残存しない。床面も軟質で、辛うじて小鉢片とみられる破片が出土しただけである。7、8、9号は、調査地区の北側に位置し、7号は、プランの半分弱程度の調査であるが、比較的規模が大きく、また8号を切っている。炉といわゆる貯蔵用ピットが存在するが、支柱穴は不明確である。8号は、南側の2本の支柱穴と梯子ピットと貯蔵ピットを検出している。9号は北西側のプランのみの調査であったが支柱穴1本と炉が認められた。3軒とも出土遺物は少なく、7号が台付甕、高坏、鉢、壺などの破片を伴っている。

10号竪穴住居跡は、プランの南東隅付近のみの調査であるが、床面、壁の立ち上がりともしっかりしている。11号と主軸方向が似ており(N-35°-W)、出土遺物からみて同時期の可能性がある。11号は、比較的大型で長軸は、5.85mを測る。支柱穴は4本で底部に柱のアタリ痕をもつ。南側ピットのアタリ痕と底部は方形の平面を示している。支柱穴の間隔は1.3~1.4mである。カマドを北西側壁に備えるが、住居廃絶時に破壊したとみられ、一部に袖に使用されたとみられる粘土塊を数ヶ所残すだけであった。床面の推定面積は約13.5m²である。出土遺物は直接伴うと考えられるものはないが、覆土下位より、須恵器蓋坏片3点、土師器高台付坏がある。12号は、調査地区の中央付近に位置し、プランの東側を8号土坑と16号竪穴住居跡に切られている。カマドは存在していたと考えられる。壁付近にピットが4本認められ、西側壁中央付近のピットは、出入口用の梯子ピットであろう。推定床面積は約6.0m²である。13号は東側壁にカマドをもち、カマドは煙道部が少し竪穴壁外に入り込む形体であり、袖部に布目瓦片(女瓦)を補強材として使用している。12号竪穴住居跡より新しく16号竪穴住居跡より古い。また、17号土坑より新しく、22号土坑(火葬墓)より古い。14号は、17号と同様の形体と考えられ、主軸方向も似ている(N-20~28°-W)。ほぼ全掘され、平面形体は、やや胴張りの隅円長方形である。また、ピットが床面中央に4本直線的に並んでいる。炉やカマドはみられない。東側端部を2号土坑が切っている。床面積は約9.8m²である。出土遺物は、土師器の坏、皿類が多く、完

第1表 新旧遺構番号一覧表

当報告書	調査時	当報告書	調査時	当報告書	調査時
住1	No.3 a	住13	No.8	坑6	No.7
2	No.3 b	14	No.4	7	No.17
3	No.3 c	15	No.25	8	No.18 a
4	No.28	16	No.9	9	No.22
5	No.27	17	No.11	10	No.19
6	No.2 b	掘1	No.23 a	11	No.15
7	No.14	2	No.23 b	12	No.20
8	No.13	坑1	No.1	13	No.21
9	No.12	2	No.6	14	No.29
10	No.24	3	No.5	15	No.30
11	No.10	4	No.26	16	No.18 b
12	No.2	5	No.16		

第2表 遺構表

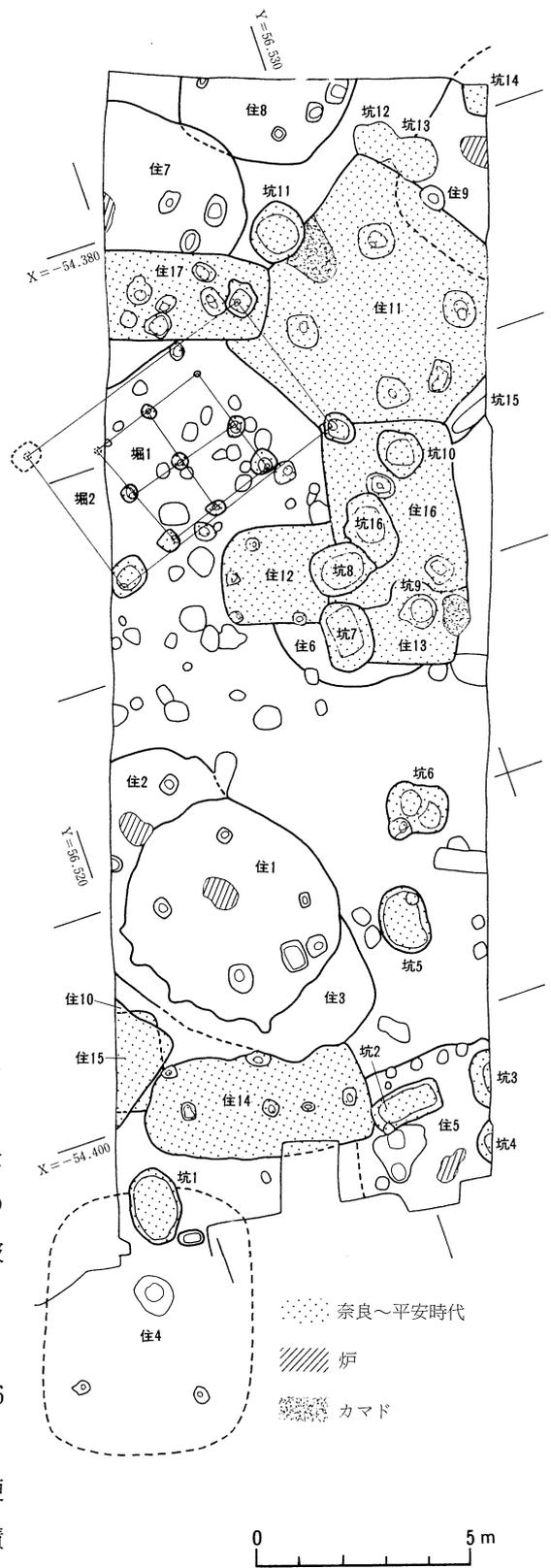
大きさ単位cm

遺構の名称	平面形体	上端		下端		深さ	主軸方向	その他	挿図番号	
		長軸	短軸	長軸	短軸					
1号竪穴住居跡	長円形(小判型)	515	460	500	440	25	N-26°-W	主柱穴4本、炭・焼土多い。地床炉	第4・5図	
2 "	"					15		地床炉	第5図	
3 "	"					7	N-17°-W		"	
4 "	長円形か						N-16°-E	主柱穴3本確認	地床炉	第6図
5 "	"					18		地床炉	"	
6 "	"					10			第8図	
7 "	"					40	N-46°-E	地床炉	第6図	
8 "	"					26		主柱穴2本確認	第9図	
9 "	"					20		主柱穴1本 "	地床炉	"
10 "	隅円方形か					13			"	
11 "	隅円方形	582	550	555	500	32	N-35°-W	主柱穴4本	カマド	第7図
12 "	隅円長方形		239		218	18	N-20°-E			第8図
13 "	隅円方形	283	245			7	N-10°-E		カマド	"
14 "	隅円長方形	531	244	498	204	25	N-20°-E	主柱穴4本か		"
15 "	隅円長方形か		240			34	N-35°-W			第9図
16 "	長方形	440	428	300	278	29	N-12°-E	ピット2本有り、南側が内側に突出。		第10図
17 "	隅円長方形		215		190	31	N-28°-E	主柱穴3本確認		第9図
1号掘立柱建物跡		長軸	300	短軸	290		N-20°-W	2間×2間の総柱		第12図
2号 "		長軸	630	短軸	395		N-20°-W	2間×3間の側柱		"
1号土坑	長円形	186	132	161	116	21	N-50°-W			第10図
2 "	隅円長方形	180	84	90	59	55	N-10°-W			"
3 "	不整円形か	168	113			35				"
4 "	"	99	52			33				"
5 "	長円形	161	110	139	85	12	N-12°-E			"
6 "	不整円形	167	153			45		底部2ヶ所、ピットもみられる。		"
7 "	隅円方形	165	107	111	67	52	N-40°-W			第11図
8 "	不整円形	141	108	103	80	46	N-30°-W	底部隅にピット有り		"
9 "	"	94	78	54	52	45		骨片、炭、灰有り		"
10 "	"	110	103	67	64	45				"
11 "	"	135	124	104	87	52				"
12 "	"	110	93	93	66	30		底部隅にピット有り		"
13 "	"	107	106	81	70	21				"
14 "	不整円形か					36				"
15 "	不整長円形か					41	N-20°-W			"
16 "	不整円形	174	110	94	68	40	N-30°-W			"



第2図 調査地区周辺の地形図

形に近い内黒の高台付堦、底部を穿孔された堦片などがある。また、布目瓦片と鉄滓がみられる。15号は14号と切り合っていると考えられるが、床面レベルが高くかなり残存状況が不良であったために新旧は不明である。しかし15号のプラン西側では、硬質の床面が明確に存在した。出土遺物は、土師器坏、小皿、堦類の破片と鉄製の刀子片がみられる。16号は、平面形体が長方形で、8号、10号土坑に切られているが、プランは完掘している。また、南側壁の中央部が約50cmほど半円形に内側へ張り出している。16号土坑より新しい。支柱穴と考えられるピットは認められないが、小ピットが2本南東隅と北側の床面に存在する。床面はあまり硬質ではなく、炉と考えられる部分が南側床面に存在する。床面積は約10㎡である。出土遺物は、土師器坏・堦・小皿類が多く、完形の内黒高台付堦、甑片、鉄滓、布目瓦片などがみられる。17号は、先述したように、14号と同様の形体と推定される。11号を切



第3図 調査地区全体図

り、ピットが床面中央に直線的に並ぶ。カマドは付設されないと考えている。出土遺物は、土師器坏、碗、小皿類が多く、他に土錘、鉄釘、鉄片、鉄滓などがみられる。

1号掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱建物と考えられ、北西側のピットが未掘である。掘り方は円形で小さいが底部に柱のアタリ痕跡がすべてのピットに認められる。柱間隔は、1.20m～1.40mである。2号掘立柱建物跡は、検出状況が悪いが、2間×3間の側柱建物と推定される。4隅の柱穴の掘り方が大きく、柱のアタリ痕が底部に認められる。柱間隔は、南側列で1.20m～1.55mである。各々の出土遺物は皆無であり、新旧関係も不明である。

土坑は、平面形体が長円形、隅円長方形(隅円方形)、不整円形がみられ、15号以外はすべて覆土にローム土塊を多量に含み、人為的に埋めもどしている。いずれも土坑墓と考えている。出土遺物は、土師器坏、小皿、碗類を検出した土坑が、1、2、6、7、11、14号である。また、1号と2号から鉄製刀子片が出土している。2号と7号は平面形体が長方形を基本としており、掘り込みが深く50cmを越える。6号は、2基が土層観察より重なっているようにみえるが、ここでは1基分として取り上げておく。9号は、灰、炭とともに骨粉が中位付近より出土しており、火葬墓と考えられる。15号は、16号竪穴住居跡に切られており、覆土は自然堆積で、他の土坑とは時期性格を異にしている(古い?)とみられる。

第8表 遺物実測図の遺構対照表

第13図 1～9	1号竪穴住居跡	第16図 1～36	16号 //	第19図 1	その他の出土遺物
10～13	6号 //	第17図 1～42	17号 //	2	1号土坑
14～20	7号 //	4のみ	11号土坑	3	2号 //
24～31	8号 //	第18図 1～5	1号土坑	4	2号 //
21、22、23 32～35 }	9号 //	6～8	2号土坑	5～7	15号竪穴住居跡
第13図36～42	15号 //	9、10	6号 //	8	10号 //
第14図 1～8	11号 //	11	14号 //		
8～19	12号 //	12	10号 //		
20～29	13号 //	13	その他の出土遺物		
第15図 1～17	14号 //				
18～26	10号 //				

第3表 出土遺物表(1)

挿図番号	種類	器種	遺存度	法量cm	胎土	焼成	色調	形態の特徴、成整形技法など
図13-1	弥生土器	甕	口縁部小片	器厚0.6	砂粒少量含	普通	両面明褐色	口唇部が押圧による波状
図13-2	弥生土器	鉢	体部~口縁	器厚0.5	砂粒少量含	少し良好	両面淡褐色	小型の鉢、口唇部斜縄文、口縁部羽状縄文→沈線
図13-3	弥生土器	壺	口縁部小片	器厚0.7	緻密	不良	内面茶褐色 外面淡褐色	複合口縁、口唇部に斜縄文
図13-4	弥生土器	壺	口縁部小片	器厚0.5	砂粒少量含	普通	両面淡褐色	口唇部押捺による波状
図13-5	弥生土器	壺	体部片	器厚0.7	緻密	不良	両面暗褐色	斜行縄文→沈線(外面)
図13-6	弥生土器	壺	胴部小片	器厚0.65	砂粒多く含	不良	両面明褐色	沈線で囲まれた羽状縄文(外面)
図13-7	弥生土器	鉢	体部片	器厚0.5	砂粒少量含	普通	両面淡褐色	上部に段をもち端部に押捺
図13-8	弥生土器	壺	口頸部付近	器厚0.5	緻密	少し不良	両面暗褐色	外面刷毛目→沈線→羽状縄文3段 少し厚手、外面S字状結節文→斜行縄文
図13-9	弥生土器	壺	胴部片	器厚0.9	緻密	普通	内面淡褐色	
図13-10	弥生土器	鉢	口縁部片	口径14.0	緻密	普通	両面暗褐色	内面赤彩、口唇部縄文、口縁部羽状縄文→沈線→赤彩
図13-11	弥生土器	鉢	口縁部片	器厚0.55	緻密	普通	両面暗褐色	口唇部縄文、口縁部羽状縄文→沈線→赤彩。小型。
13-12	弥生土器	鉢	口縁部小片	器厚0.75	緻密	普通	外面褐色	内面と外面の一部赤彩→斜縄文→沈線
図13-13	弥生土器	壺	胴部小片	器厚0.6	緻密	少し不良	内面淡褐色 外面暗褐色	外面斜行縄文
図13-14	弥生土器	壺	口縁部片	器厚0.6	砂粒多く含	普通	暗褐色 淡褐色	複合口縁 刺突文有り
図13-15	弥生土器	鉢	口縁部~体部片	口径27	砂粒少量含	少し不良	茶褐色 暗赤褐色	口唇部斜縄文、口縁部羽状縄文→沈線、内面横方向ヘラミガキ
図13-16	弥生土器	台付甕	台部のみ	台部下端径11.9	緻密	少し不良	淡茶褐色 黒褐色	摩耗多し。煤付着
図13-17	弥生土器	台付甕	台部のみ	台部下端径8.8	砂粒を含む	普通	淡茶褐色 暗褐色	内面横方向ヘラミガキ、外面縦方向ヘラミガキ、台部との接合部に補強の柄をもつ
図13-18	弥生土器	(甕)	胴部片	器厚0.55	砂粒少量含	不良	淡黒褐色	外面に刷毛目
図13-19	弥生土器	壺	底部のみ	底径6.3	砂粒多く含	普通	淡褐色 暗褐色	外面ヘラミガキ
図13-21	弥生土器	壺	口縁部片	器厚0.65	砂粒多く含	不良	淡橙褐色 暗褐色	複合口縁、端部押捺→ヘラミガキ 両面摩耗多し。
図13-22	弥生土器	壺	口縁部片	器厚0.65	緻密	良好	暗褐色 淡褐色	複合口縁、口唇部縄文、両面ヘラミガキ
図13-23	弥生土器	壺	口縁部片	器厚0.5	砂粒少量含	少し不良	淡橙褐色 暗褐色	複合口縁、円形浮文有り
図13-24	弥生土器	甕	口縁部片	器厚0.5	砂粒少量含	良好	両面暗褐色	口唇部波状、口縁部粘土積み痕
図13-25	弥生土器	甕	口縁部片	器厚0.7	砂粒少量含	普通	両面淡褐色	口唇部波状、口縁部粘土積み痕
図13-26	弥生土器	壺	胴部小片	器厚0.7	砂粒含	少し不良	内面明褐色 外面茶褐色	外面に斜行縄文
図13-27	弥生土器	甕	口縁部小片	器厚0.7	緻密	少し不良	両面暗褐色	粘土紐接合痕を残す。
図13-28	弥生土器	壺	底部片 $\frac{1}{3}$	底径6.5	砂粒多く含	良好	内面暗褐色 外面茶褐色	外面横方向ヘラケズリ
図13-29	弥生土器	台付甕	台上部片	上部径5.0	緻密	良好	両面茶褐色	外面横方向のミガキ
図13-30	弥生土器	壺	胴部小片	器厚0.8	緻密	不良	同上	同上
図13-31	弥生土器	壺	胴部小片	器厚0.7	緻密	不良	両面淡褐色	外面赤彩→沈線→斜縄文
図13-32	弥生土器	壺	口縁部片	器厚1.8	砂粒多く含	普通	淡橙褐色	口唇部羽状縄文、端部刻目 他はヘラミガキ
図13-33	弥生土器	壺	胴部片	器厚0.7	砂粒を含む	良好	淡褐色 赤褐色	内面刷毛目、外面一部赤彩
図13-34	弥生土器	壺	胴部片	器厚0.85	緻密	良好	暗赤褐色 暗褐色	円形などの赤彩有り 内面は刷毛目
図13-35	弥生土器	壺	胴下部片	器厚1.2	緻密	やや不良	暗褐色 淡明褐色	外面ヘラミガキ一部赤彩 内面ヘラ横ナデツケ
図13-36	土師器	坏	全体の40%	口径12.7 底径6.0 器厚0.44	緻密	普通	暗褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し
図13-37	土師器	(高台付 碗)	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径13.0	緻密	普通	暗褐色	内面ヘラミガキと黒色処理 ロクロ水挽き
図13-38	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{6}$	底径5.2	緻密	普通		ロクロ水挽き、右回転 糸切り離した後無調整
図13-39	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{6}$	口径13.4	緻密	少し不良	淡茶褐色	少し大きく開く。ロクロ水挽き
図13-40	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{8}$	底径6.1	緻密	不良	黒褐色	ロクロ水挽き、糸切り離した後無調整
図13-41	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{6}$	底径5.5	緻密	不良	暗褐色	ロクロ水挽き、糸切り離した後無調整
図13-42	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{2}$	底部4.3	緻密	普通	褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離した後無調整

第4表 出土遺物表(2)

挿図番号	種類	器種	遺存度	法量cm	胎土	焼成	色調	形態の特徴、成整形技法など
図14-1	土師器	高台付坏	全体の20% 高台部欠損	口径16.6 底径12.2	緻密	良好	赤褐色 橙色	ロクロ未使用、両面赤彩とヘラミガキ
図14-2	須恵器	蓋坏	口縁部5%	口径20.0	緻密	普通	淡灰褐色	同下
図14-3	須恵器	蓋坏	口縁部10%	口径15.7	緻密	やや不良	淡灰褐色 暗灰色	退化したかえりと宝珠形?のつまみをもつ
図14-4	須恵器	蓋坏	天井部のみ		白色細砂粒	良好	灰色	宝珠形の扁平したつまみ
図14-5	須恵器	長頸壺	口縁部5%	口径9.2	緻密	良好	灰色 淡灰色	
図14-6	土師器	高坏	脚部のみ $\frac{1}{3}$	下端径9.5	鉄分粒少量含む	少し不良	両面淡褐色	内面ヘラヨコナデ、摩耗が多い。
図14-7	須恵器	甕	胴部小片	器厚0.95	緻密	普通	淡灰褐色	外面タタキ目、内面ナデ
図14-8	土師器	坏	体部~口縁部 の $\frac{1}{4}$	口径16.5	緻密	良好	両面淡褐色	ロクロ水挽き。少し厚手。
図14-9	土師器	坏	体部~口縁部 の $\frac{1}{8}$	口径15.2	緻密	不良	両面淡橙褐色	ロクロ水挽き。底部はやや広いとみられる。
図14-10	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径19.0	緻密	不良	両面茶褐色	ロクロ水挽き
図14-11	土師器	坏	体部~口縁部 の $\frac{1}{8}$	口径9.6	緻密	普通	両面褐色	体部は直線的に開く。ロクロ水挽き。
図14-12	土師器	坏	体部~口縁部 の $\frac{1}{8}$	口径14.7	緻密	普通	両面褐色	ロクロ水挽き
図14-13	土師器	甕	胴下部 $\frac{1}{8}$	底径11.0	緻密	良好	両面暗褐色	底部に焼成前の穿孔がみられる。ロクロ水挽き
図14-14	土師器	高台付碗	底部 $\frac{1}{8}$	高台径6.6	緻密	普通	両面黒色	ロクロ水挽き、回転、糸切り離した後無調整
図14-15	土師器	高台付碗	底部 $\frac{1}{4}$	高台径7.8	緻密	少し不良	内面黒色 外面淡褐色	ロクロ水挽き、内面黒色処理回転、糸切り離し後無調整
図14-16	土師器	坏	口縁部欠損	底径7.0	緻密	不良	両面淡茶褐色	ロクロ水挽き(右回り)、回転糸切り離し無調整
図14-17	土師器	坏	底部 $\frac{1}{3}$	底径9.2	緻密	普通	両面淡褐色	ロクロ水挽き
図14-18	土師器	坏	底部 $\frac{1}{4}$	底径8.5	緻密	少し不良	内面淡褐色 外面暗褐色	ロクロ水挽き、回転糸切り離し後無調整
図14-19	土師器	坏	底部のみ	底径6.3	緻密	不良	内面茶褐色	ロクロ水挽き、胎土に金雲母有
図14-20	土師器	高台付碗	全体の70%	口径11.4 高台径5.5 器高5.0	同上	普通	明褐色~褐色	同上
図14-21	土師器	坏	全体の70%	口径11.4 底径5.9 器高3.8	緻密 白色粒と赤褐色粒含	普通	橙褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図14-22	土師器	碗	口縁部 $\frac{1}{6}$	口径11.5	緻密	不良	淡褐色	ロクロ水挽き
図14-23	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径13.0	緻密	少し不良	暗茶褐色	ロクロ水挽き
図14-24	土師器	坏	底部 $\frac{1}{2}$	底径6.0	緻密	普通	暗茶褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図14-25	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径19.1	緻密	不良	淡茶褐色	ロクロ水挽き、カマド粘土附着
図14-26	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{6}$	口径17.0	緻密	少し不良	暗褐色	ロクロ水挽き
図14-27	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{6}$	口径14.0	緻密	少し不良	暗褐色	ロクロ水挽き
図15-1	土師器	高台付碗	全体の60%	口径14.4 高台径6.6 器高6.0	緻密 白色粒含	普通	明褐色 褐色	高台は三日月高台の退化形態、内面ヘラミガキ、ロクロ水挽き
図15-2	土師器	坏	底部のみ	底径7.9	緻密 赤褐色粒含	普通	両面淡褐色	底部中央に焼成前の穿孔 ロクロ水挽き
図15-3	土師器	坏	底部 $\frac{1}{3}$	底径7.2	緻密	少し不良	両面淡茶褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図15-4	土師器	小皿	底部のみ	底径5.5	緻密	少し不良	両面淡橙褐色	ロクロ水挽き
図15-5	土師器	高台付碗	底部のみ	高台径6.0	緻密	良好	両面茶褐色	内面横方向のヘラミガキ ロクロ水挽き
図15-6	土師器	坏	底部のみ	底径6.4	緻密	普通	淡褐色 一部黒褐色	ロクロ水挽き、右回転、回転糸切り離し無調整
図15-7	土師器	坏	底部 $\frac{1}{4}$	底径7.4	緻密	不良	淡橙褐色 一部暗褐色	ロクロ水挽き
図15-8	土師器	碗	底部 $\frac{1}{4}$	底径6.7	緻密	少し不良	黒色 淡橙褐色	内面黒色処理、縦方向ヘラミガキ、ロクロ水挽き、右回転、回転糸切り離し無調整
図15-9	土師器	小皿	底部のみ	底径5.7	砂粒少量含	良好	淡橙褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図15-10	土師器	小皿	底部のみ	底径5.8	緻密	良好	淡褐色	ロクロ水挽き 静止糸切り離し後無調整
図15-11	土師器	坏	底部 $\frac{1}{3}$	底径6.6	緻密	不良	淡橙褐色 暗茶褐色	ロクロ水挽き 同上
図15-12	土師器	小皿	底部のみ	底径5.7	緻密	良好	淡褐色 淡橙褐色	ロクロ水挽き、右回転、回転糸切り離し無調整
図15-13	土師器	小皿	底部のみ	底径5.5	緻密	普通	両面淡褐色	ロクロ水挽き、同上

第5表 出土遺物表(3)

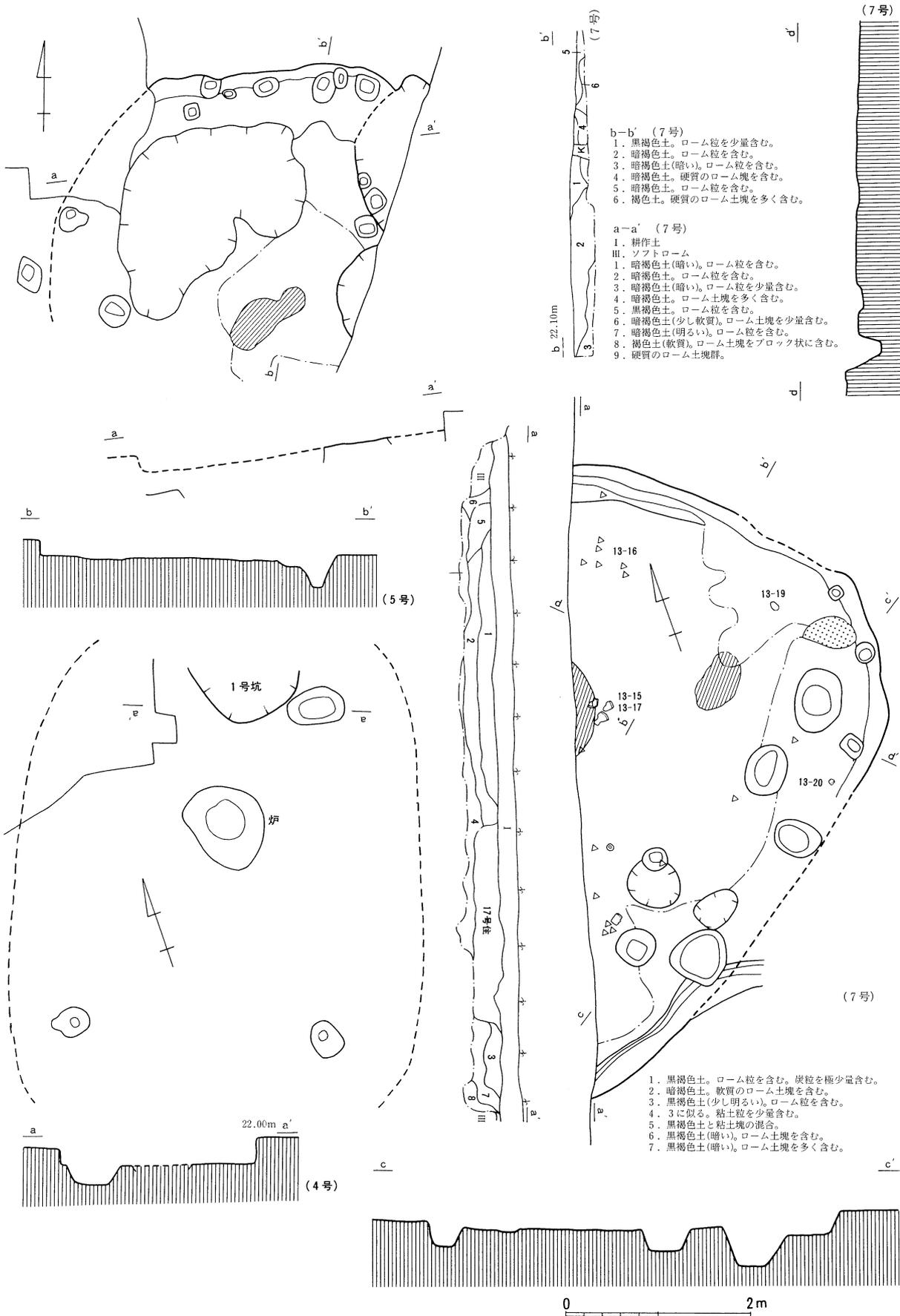
挿図番号	種類	器種	遺存度	法量cm	胎土	焼成	色調	形態の特徴、成整形技法など
図15-14	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{2}$	底径5.4	緻密	普通	両面褐色	ロクロ水挽き、右回転?
図15-15	土師器	小皿	底部のみ	底径5.4	緻密	普通	両面淡褐色	ロクロ水挽き、右回転
図15-16	土師器	小皿	底部のみ	底径5.5	緻密	少し不良	淡橙褐色 淡褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し後無調整
図15-17	須恵器	長頸壺	頸部片	器厚0.7	緻密	普通	灰褐色 暗灰色	
図15-18	土師器	鉢	口縁部 $\frac{1}{10}$	口径9.7	緻密	少し不良		小型の鉢とみられる、内面に金雲母粒?が付着している。
図15-19	土師器	甕(鉢)	底部 $\frac{1}{6}$	底径6.2	緻密	少し不良	暗褐色 黒褐色	外面横方向のヘラケズリ
図15-20	須恵器	甕	口縁部片	器厚1.0	緻密	普通	灰色	外面に沈線と突帯有り
図15-21	須恵器	甕	口縁部片	器厚0.9	緻密	普通	暗灰色口縁部 灰色	外面に波状文
図15-22	須恵器	甕	胴部片	器厚0.8	砂粒極少量含む	普通	暗灰色 黒灰色	外面にタタキ目
図15-23	須恵器	甕	胴部片	器厚1.1	白色粒含む	普通	暗灰色 淡灰褐色	内面アテ目、外面タタキ目
図15-24	須恵器	坏	口縁部 $\frac{1}{10}$	口径7.5 体部径8.9	緻密	普通	暗灰色	小片。受部の立ち上がりがしっかりしている。
図15-25	須恵器	高台付坏	底部 $\frac{1}{6}$	高台径8.9	緻密 白色粒含む	普通	淡灰色	底部が少し張っている。底部にヘラ記号有り
図16-1	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{6}$	口径16.3	緻密	普通	淡褐色	ロクロ水挽き
図16-2	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径15.3	緻密	普通	淡褐色	ロクロ水挽き
図16-3	土師器	坏	口縁部片 $\frac{1}{4}$	口径12.7	一部小礫含む	普通	淡褐色	ロクロ水挽き
図16-4	土師器	坏	底部片 $\frac{1}{8}$	底径10.4	緻密	普通	淡褐色口縁部 淡橙褐色	ロクロ水挽き
図16-5	土師器	甕	底部片 $\frac{1}{6}$	底径9.5	緻密	少し不良	黒褐色 淡褐色	煤付着、底部穿孔
図16-6	土師器	甕	底部片 $\frac{1}{8}$	底径8.4	緻密	不良	淡褐色	摩耗多い。
図16-7	土師器	坏	底部のみ	底径6.5	緻密	少し不良	淡褐色 黒褐色	ロクロ水挽き 糸切り離し無調整
図16-8	土師器	甕	底部片 $\frac{1}{3}$	底径5.8	緻密	不良	暗褐色 淡褐色	両面ともヘラナデ
図16-9	土師器	坏	底部片 $\frac{1}{6}$	底径6.7	緻密	普通	淡暗褐色	ロクロ水挽き 糸切り離し無調整
図16-10	土師器	坏	底部片 $\frac{1}{8}$	底径7.6	緻密	普通	淡橙褐色 暗茶褐色	
図16-11	須恵器	甕	胴部小片	器厚0.6	緻密	普通	黒褐色	外面に平行タタキ目
図16-12	土師器	坏	底部のみ	底径5.4	緻密	良好	暗褐色 茶褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図16-13	土師器	坏	底部片	器厚1.1	緻密	不良	内面黒色 外面淡褐色	内面黒色処理、ロクロ水挽き 糸切り離し無調整
図16-14	土師器	高台付碗	底部片 $\frac{1}{4}$	高台径6.5	緻密	普通	暗茶褐色 淡茶褐色	ロクロ水挽き
図16-15	土師器	坏	底部のみ	底径5.3	緻密	良好	淡褐色 淡茶褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図16-16	土師器	坏	底部のみ	底径5.2	緻密	普通	淡褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図16-17	土師器	小皿	底部片 $\frac{1}{4}$	底径4.6	緻密	普通	淡褐色 暗茶褐色	ロクロ水挽き 糸切り離し無調整
図16-18	土師器	小皿	底部のみ	底径4.2	砂粒少量含む	普通	淡褐色	ロクロ水挽き、右回転、同上
図16-19	土師器	足高高台付小皿	底部のみ	高台径5.5	緻密	普通	暗褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図16-20	土師器	小皿	底部のみ	底径4.7	砂粒少量含む	普通	淡褐色 淡橙褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図16-21	土師器	小皿	底部のみ	底径4.8	砂粒少量含む	少し不良	褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り無調整
図16-22	土師器	足高高台付小皿	底部片 $\frac{1}{3}$	高台径4.2	緻密	普通	茶褐色	ロクロ水挽き
図16-24	須恵器	高台付坏	底部 $\frac{1}{4}$	底径6.4	緻密	少し不良	淡灰色	底部は水平
図16-25	須恵器	甕	胴部片	器厚0.95	砂粒少量含む	やや不良	暗灰色 黒灰色	外面に平行タタキ目
図16-26	須恵器	甕	胴部片	器厚1.0	緻密	普通	淡灰褐色 暗灰色	外面に平行タタキ目
図16-27	須恵器	甕	口縁部片	器厚1.1	緻密	普通	淡灰色	沈線と刺突文有り
図16-28	土師器	高台付碗	完形	口径15.8 底径6.8 器高6.9	砂粒を少量含む	普通	明褐色 橙褐色 黒色	内面黒色処理、ロクロ水挽き 底部外面にヘラ記号有り
図16-29	土師器	小皿	全体の40%	口径7.4 底径4.5 器高1.4	緻密	普通	明褐色 褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図16-30	土師器	小皿	全体の70%	口径8.4 底径5.5	器高1.5	銀雲母、赤色、白色粒少し不良	明褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整

第6表 出土遺物表(4)

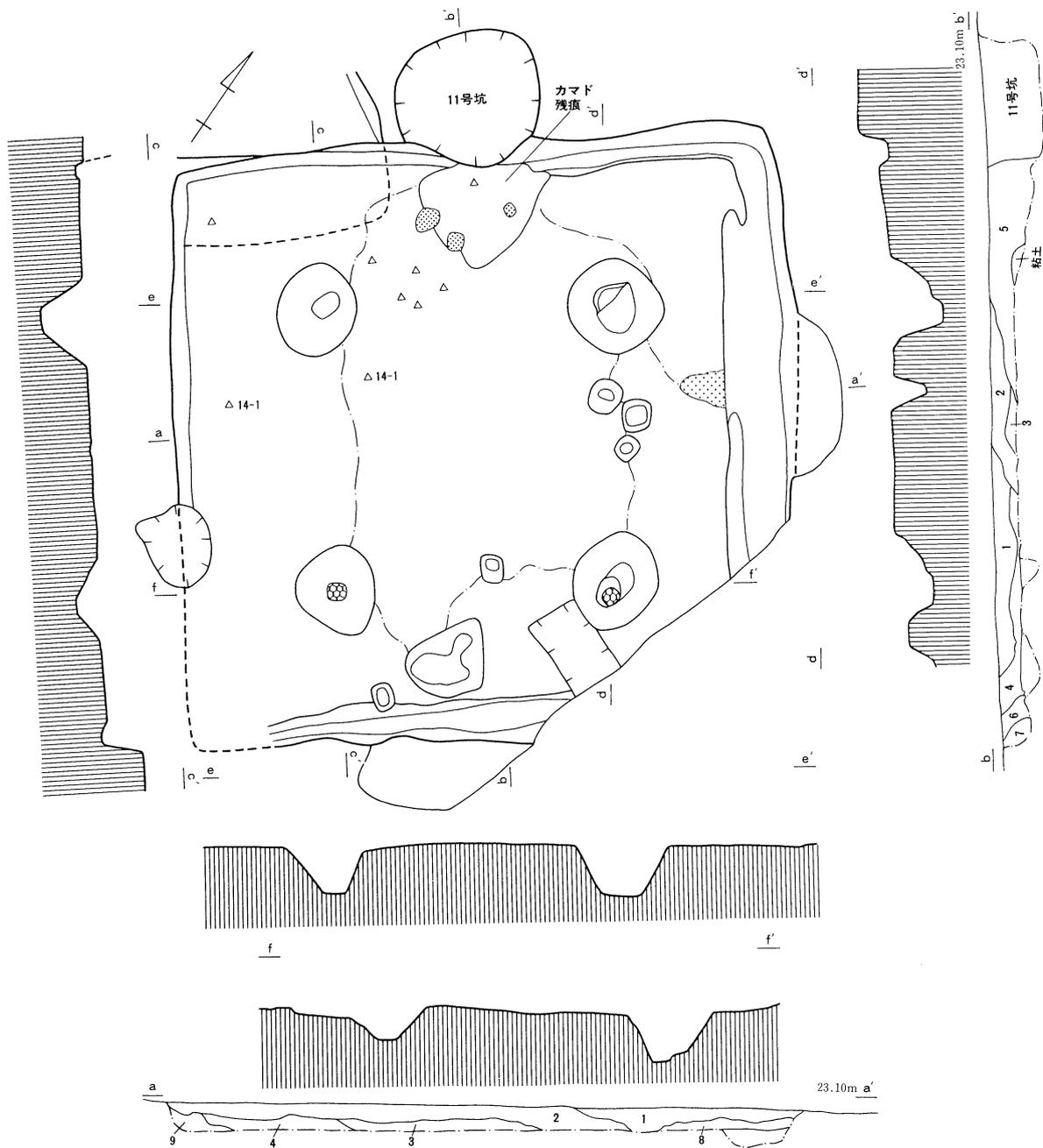
挿図番号	種類	器種	遺存度	法量cm	胎土	焼成	色調	形態の特徴、成整形技法など
図16-31	土師器	小皿	ほぼ完形	口径8.5 底径4.4 器高1.4	赤色、白色 粒	良好	明褐色 橙褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し無調整
図16-32	土師器	碗	全体の80%	口径15.7 底径6.2 器高5.3	緻密	普通	褐色 淡褐色	ロクロ水挽き 右回転 糸切り離し無調整 内面に煤付着
図16-33	土師器	坏	全体の $\frac{1}{3}$	口径14.8 器高4.2	砂粒を少量 含む	普通	暗褐色 淡茶褐色	外面横ナデ→横ヘラケズリ 内面ヘラミガキの後布状ブキ
図16-34	土師器	小皿	完形	口径8.1 底径5.0 器高5.0	砂粒少量含 赤色、白色 粒含	良好	淡褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図16-35	土師器	小皿	ほぼ完形	口径8.1 底径5.0 器高2.1	緻密	良好	橙褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図16-36	土師器	碗	全体の50%	底径6.8	緻密	普通	淡褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-1	土師器	碗	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径15.9	砂粒少量含	普通	黒色 暗褐色	内面黒色処理、ヘラミガキ ロクロ水挽き
図17-2	土師器	碗	口縁部 $\frac{1}{6}$	口径11.7	砂粒少量含	少し不良	暗褐色 暗茶褐色	内面横方向のヘラミガキ ロクロ水挽き
図17-3	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径13.0	緻密	少し不良	暗褐色 暗茶褐色	ロクロ水挽き
図17-4	土師器	小皿	全体の70%	口径8.6 底径5.8 器高1.3	緻密	やや不良	褐色 明褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図17-5	土師器	小皿	底部～口縁 $\frac{1}{4}$	口径8.5 底径5.1 器高1.7	緻密	少し不良	褐色	ロクロ水挽き、 静止糸切り離し無調整
図17-6	土師器	坏	底部のみ	底部径8.2	緻密	やや不良	褐色 淡褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図17-7	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径13.1	緻密	少し不良	淡褐色	ロクロ水挽き
図17-8	土師器	小皿	底部70%	底部径5.4	緻密	不良	淡褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図17-9	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{3}$	底径5.7	緻密	不良	淡黒褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-10	土師器	坏	底部のみ	底部径7.0	雲母少量含 緻密	普通	暗褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-11	土師器	甕	底部 $\frac{1}{6}$	底径12.9	緻密	不良	暗褐色	広くしっかりした底部、摩耗有 内面に付着物有り
図17-12	土師器	小皿	底部のみ	底部5.5	金雲母少量	不良	淡明褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図17-13	土師器	足高台付小皿	底部のみ	高台径5.7	緻密	不良	淡橙褐色 暗褐色	ロクロ水挽き
図17-14	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{4}$	底径5.2	緻密	少し不良	暗褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し？
図17-15	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{6}$	底径6.7	緻密	普通	淡橙褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し
図17-16	土師器	坏	底部 $\frac{1}{4}$	底径7.9	緻密	普通	淡褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図17-17	土師器	坏	底部 $\frac{1}{2}$	底部径7.4	緻密	少し不良	淡褐色	ロクロ水挽き、右回転？糸切り離し無調整
図17-18	土師器	小皿	底部のみ	底部径5.6	緻密	少し不良	淡明褐色 暗褐色	ロクロ水挽き、右回転 糸切り離し無調整
図17-19	土師器	高台付小皿	底部のみ	高台径6.2	緻密	不良	暗褐色	ロクロ水挽き
図17-20	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{4}$	底径6.2	緻密	やや不良	暗褐色 黒色	内面黒色処理、ロクロ水挽き 右回転、糸切り離し無調整
図17-21	土師器	小皿	底部のみ	底部径4.2	緻密	不良	淡褐色 淡橙褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-22	土師器	小皿	底部70%	底径5.2	緻密	不良	淡褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し無調整
図17-23	土師器	小皿	底部60%	底径5.8	緻密	少し不良	淡明褐色	ロクロ水挽き、右回転、糸切り離し無調整
図17-24	土師器	高台付坏	底部 $\frac{1}{6}$	高台径6.4	緻密	やや不良		ロクロ水挽き
図17-25	土師器	小皿	底部のみ	底径5.4	緻密	不良	褐色	同上、静止糸切り離し無調整
図17-26	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{2}$	底径6.2	緻密	少し不良	褐色	ロクロ水挽き、糸切り離し無調整
図17-27	土師器	小皿	体部 $\frac{1}{10}$	口径10.7 底径12.4 器高1.9	緻密	不良	明褐色	ロクロ水挽き 糸切り離し無調整
図17-28	土師器	小皿	完形	口径8.5 底径5.5 器高2.1	緻密 雲母、白色 粒含	普通	橙褐色	ロクロ水挽き、回転 糸切り離し無調整

第7表 出土遺物表(5)

挿図番号	種類	器種	遺存度	法量cm	胎土	焼成	色調	形態の特徴、成形技法など
図17-29	土師器	坏	完形	口径15.0 底径7.4 器高3.9	緻密、赤褐色粒多い	普通	橙褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し無調整
図17-30	須恵器	甕	胴部片	器厚1.2	白色粒含む	良好	暗灰色 淡灰色	外面に平行タタキ目、内面は同心円状のアテ目
図17-31	須恵器	高台付坏	底部 $\frac{1}{2}$	高台径8.3	小礫含む	良好	淡灰色	高台部も欠損。
図17-32	土師器	小皿	底部80%	底径5.8	緻密	不良	淡茶褐色 淡褐色	ロクロ水挽き、糸切り離し無調整
図17-33	土師器	(坏)	底部のみ	底径7.4	緻密	不良	褐色	ロクロ水挽き、右回転糸切り離し無調整
図17-34	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{4}$	底径6.0	緻密	不良	淡茶褐色	ロクロ水挽き、糸切り離し無調整
図17-35	土師器	壺	底部のみ	底径8.2	緻密	少し不良	暗褐色 淡褐色	ロクロ水挽き、右回転糸切り離し無調整
図17-36	土師器	小皿	底部70%	底径4.8	緻密	少し不良	淡褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-37	土師器	坏	底部 $\frac{1}{3}$	底径7.3	緻密	不良	淡明褐色	ロクロ水挽き、右回転糸切り離し無調整
図17-38	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{3}$	底径6.7	緻密	不良	淡明茶褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-39	土師器	小皿	底部60%	底径4.2	緻密	不良	淡褐色 暗褐色	ロクロ水挽き 糸切り離し無調整
図17-40	土師器	小皿	底部のみ	底径5.4	緻密	不良	淡褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-41	土師器	小皿	底部のみ	底径5.9	緻密	不良	褐色	ロクロ水挽き、同上
図17-42	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{2}$	底径6.5	緻密	不良	暗褐色 褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し？
図18-1	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{4}$	口径15.9	緻密	少し不良	淡褐色 暗褐色	少し大きく開く。ロクロ水挽き
図18-2	土師器	小皿	全体の60%	口径8.3 底径5.0 器高1.3	緻密 赤褐色粒と 白色粒含む	少し不良	明褐色	ロクロ水挽き、右回転糸切り離し無調整
図18-3	土師器	小皿	底部40%	底径5.5	緻密 銀雲母	普通	明褐色	ロクロ水挽き、回転糸切り離し無調整
図18-4	土師器	小皿	底部片		緻密	少し不良	明褐色	ロクロ水挽き、回転糸切り離し無調整
図18-5	土師器	小皿	底部片		緻密	少し不良	明褐色	ロクロ水挽き、回転糸切り離し無調整
図18-6	土師器	小皿	底部 $\frac{1}{3}$	底径5.8		少し不良	褐色	ロクロ水挽き、回転糸切り離し無調整
図18-7	土師器	小皿	底部のみ	底径4.3	緻密	普通	暗茶褐色	ロクロ水挽き、右回転糸切り離し無調整
図18-9	土師器	坏	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径16.1	緻密	普通	褐色	少し大型
図18-10	土師器	小皿	全体の60%	口径8.7 底径4.5 器高1.7	緻密	普通	褐色	ロクロ水挽き、静止糸切り離し無調整
図18-11	土師器	碗	口縁部 $\frac{1}{8}$	口径12.5	緻密	良好	褐色	内面横方向ヘラミガキ



第6図 4、5、7号竖穴住居跡実測図 (その他の水準高22.40m)

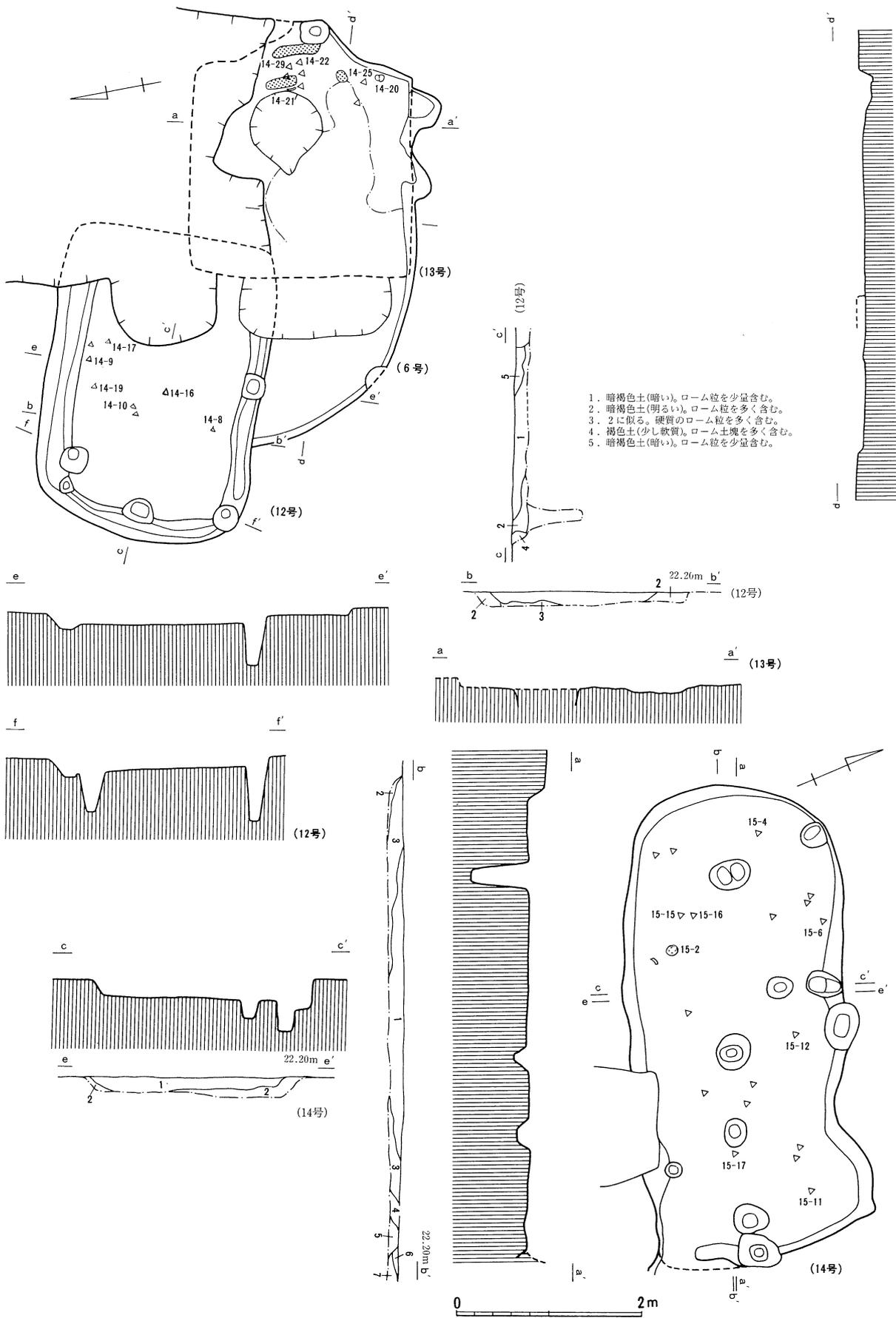


土層Section解説

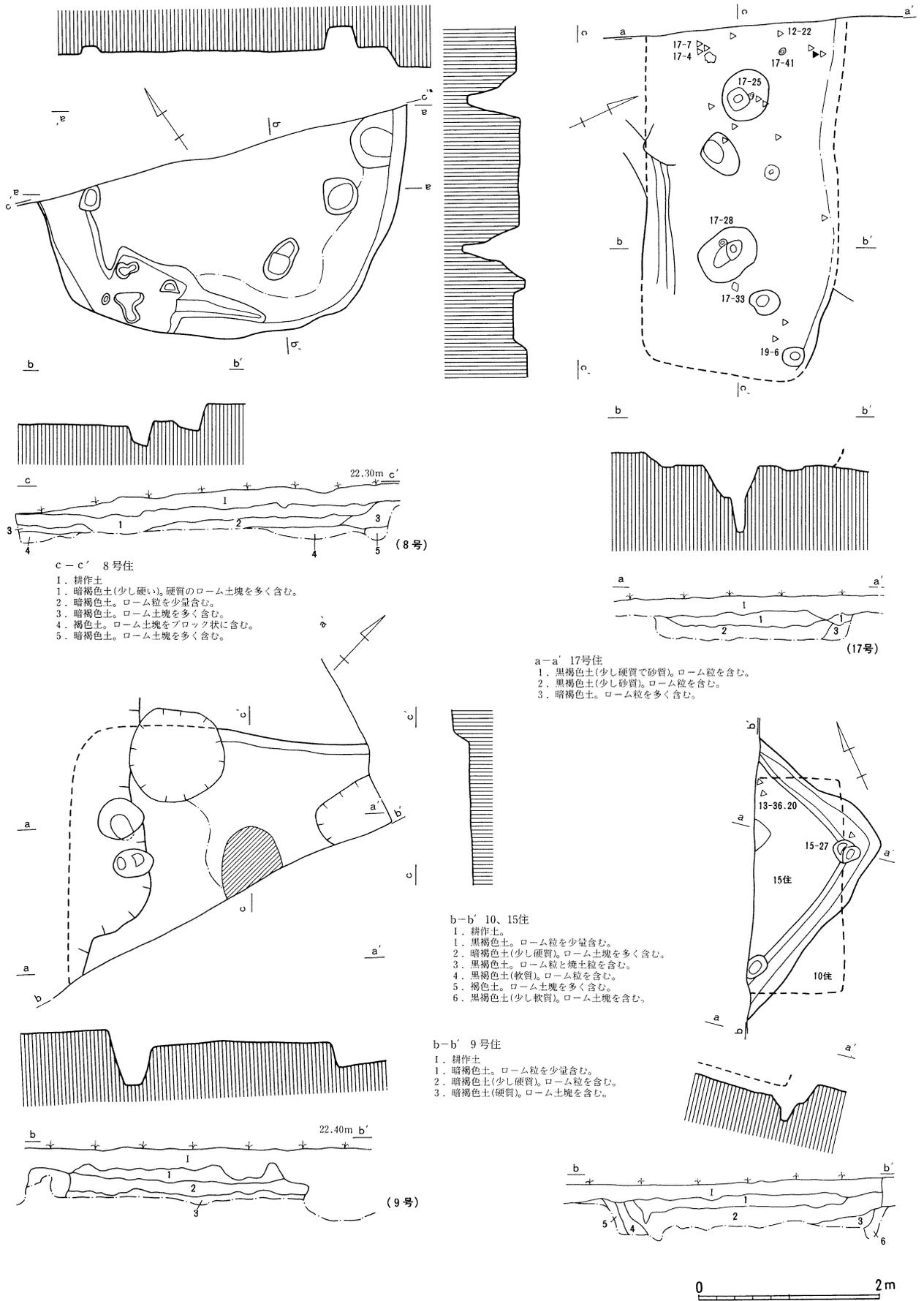
1. 黒褐色土。ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土。ローム粒を含む。
3. 黒褐色土(少し硬質)。ローム土塊を少量含む。
4. 暗褐色土。ローム土塊を含む。
5. 黒褐色土。ローム土塊を少量含む。
粘土を含む。
6. 黒褐色土(軟質)。ローム粒を少量含む。
7. 褐色土。ローム土塊を含む。
8. 暗褐色土。ローム土塊を少量含む。
9. 褐色土。ローム土塊を含む。

0 2m

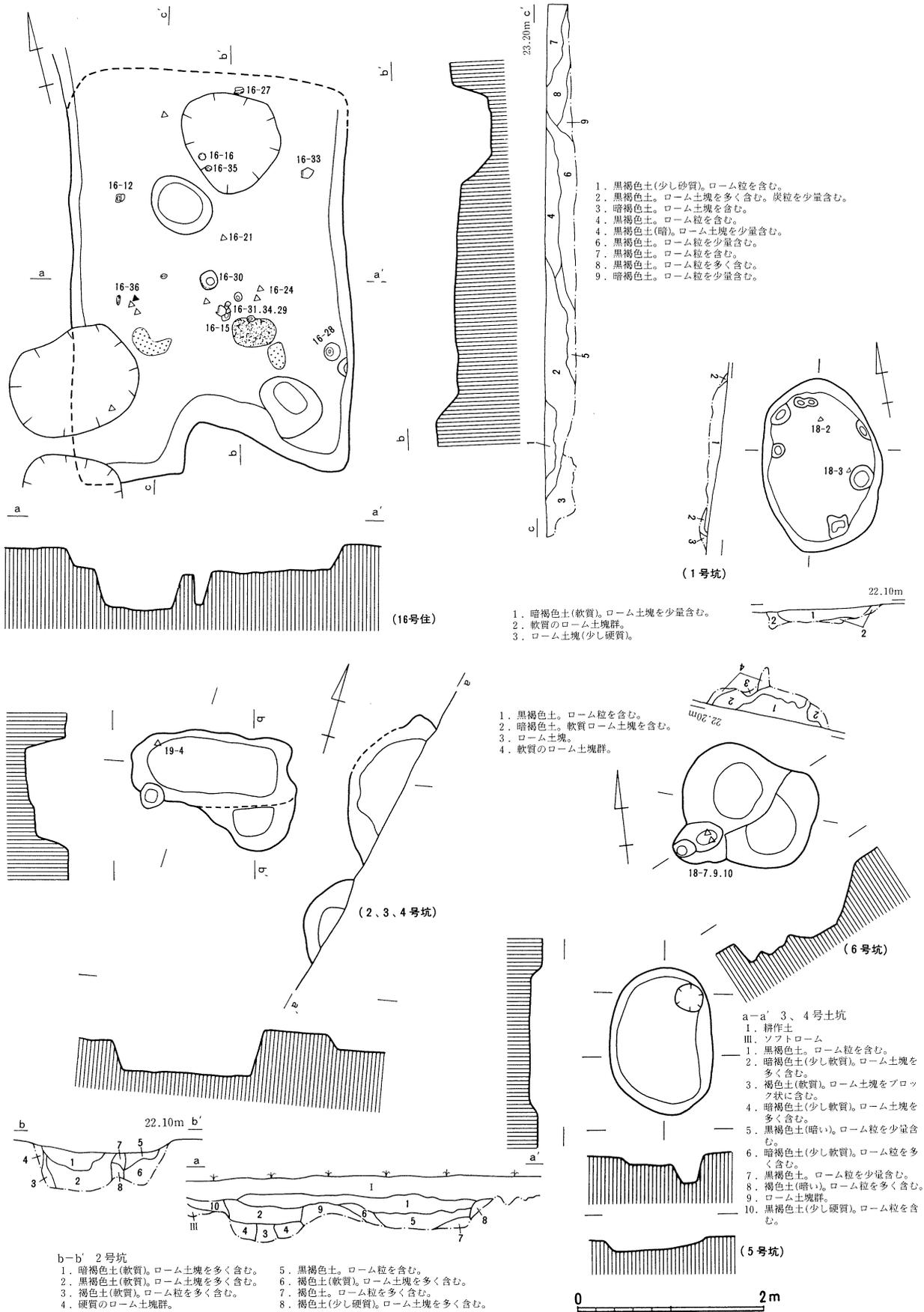
第7図 11号竪穴住居跡実測図 (その他の水準高22.40m)



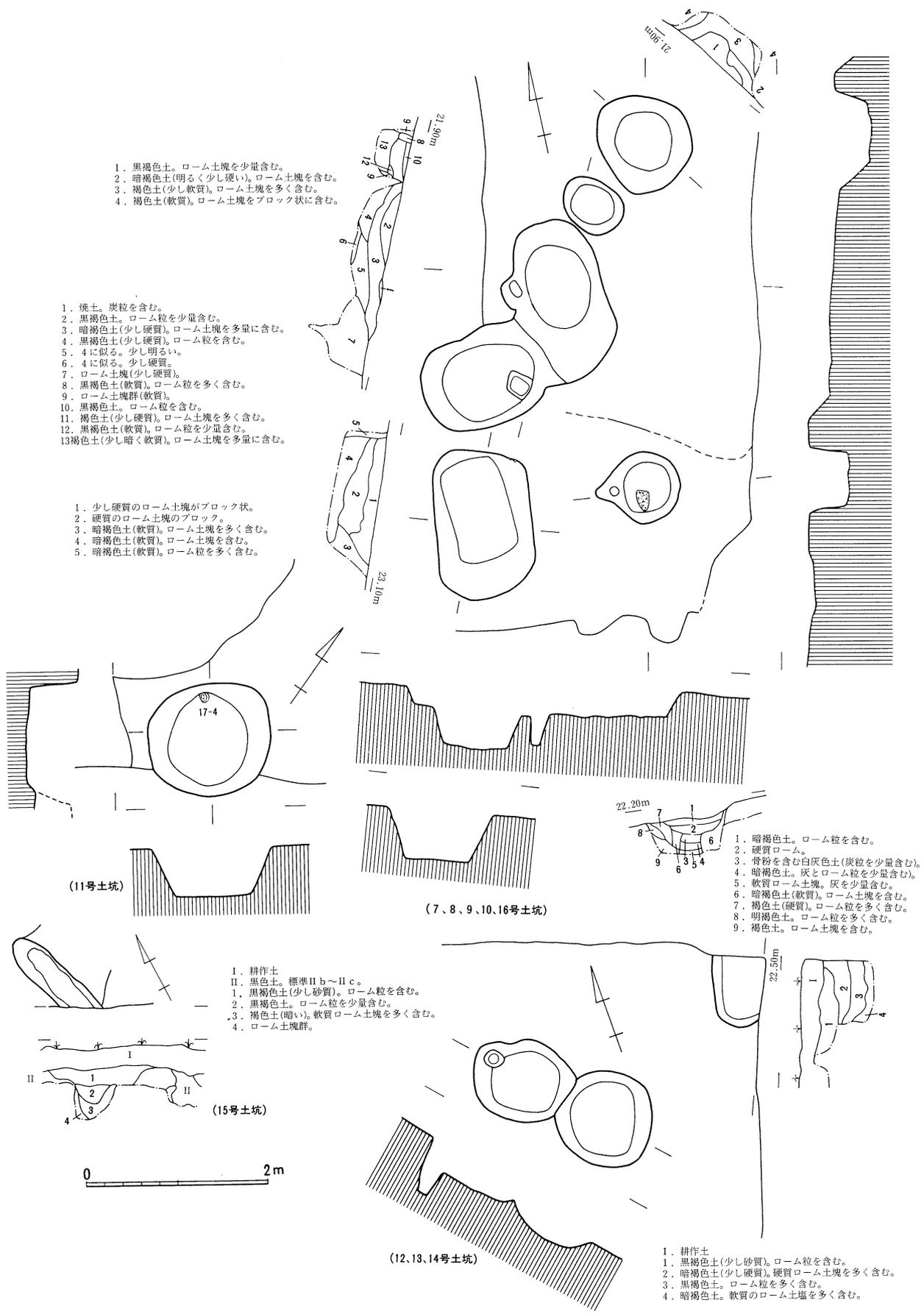
第8図 6、12、13、14号竪穴住居跡実測図 (その他の水準高22.40m)



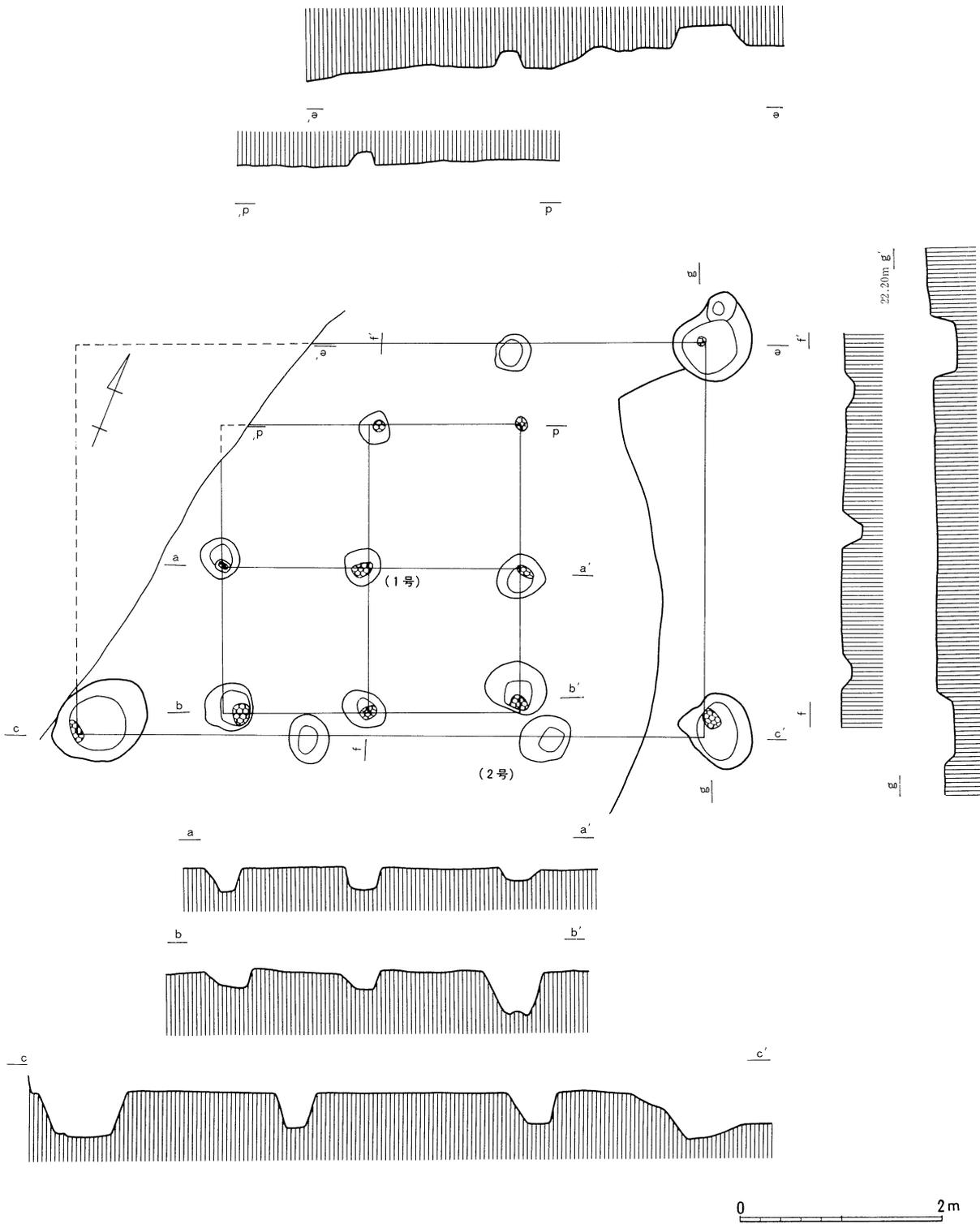
第9図 8、9、10、15、17号竪穴住居跡実測図 (その他の水準高22.40m)



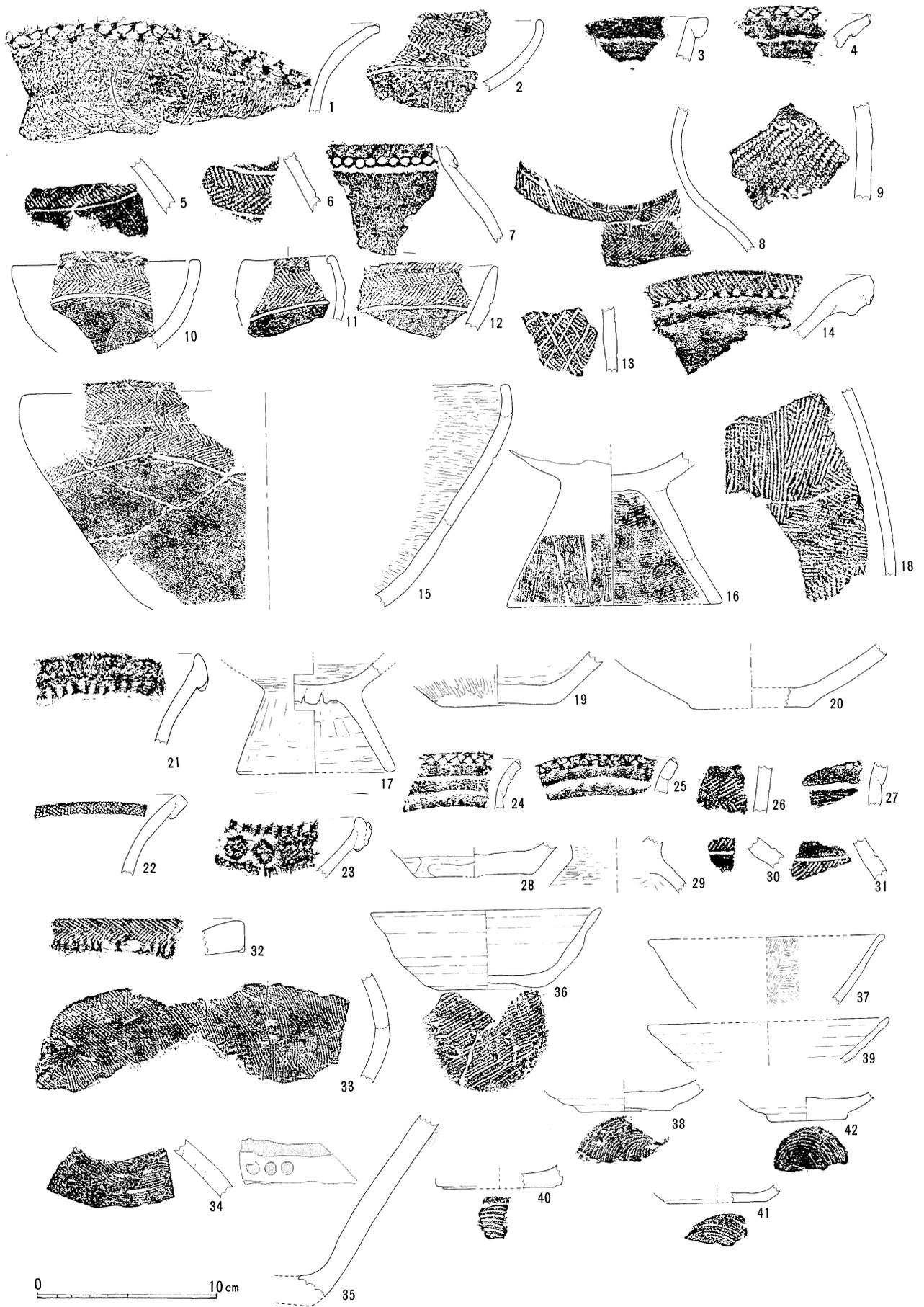
第10図 16号竪穴住居跡 1、2、3、4、5、6号土坑実測図 (その他の水準高22.40m)



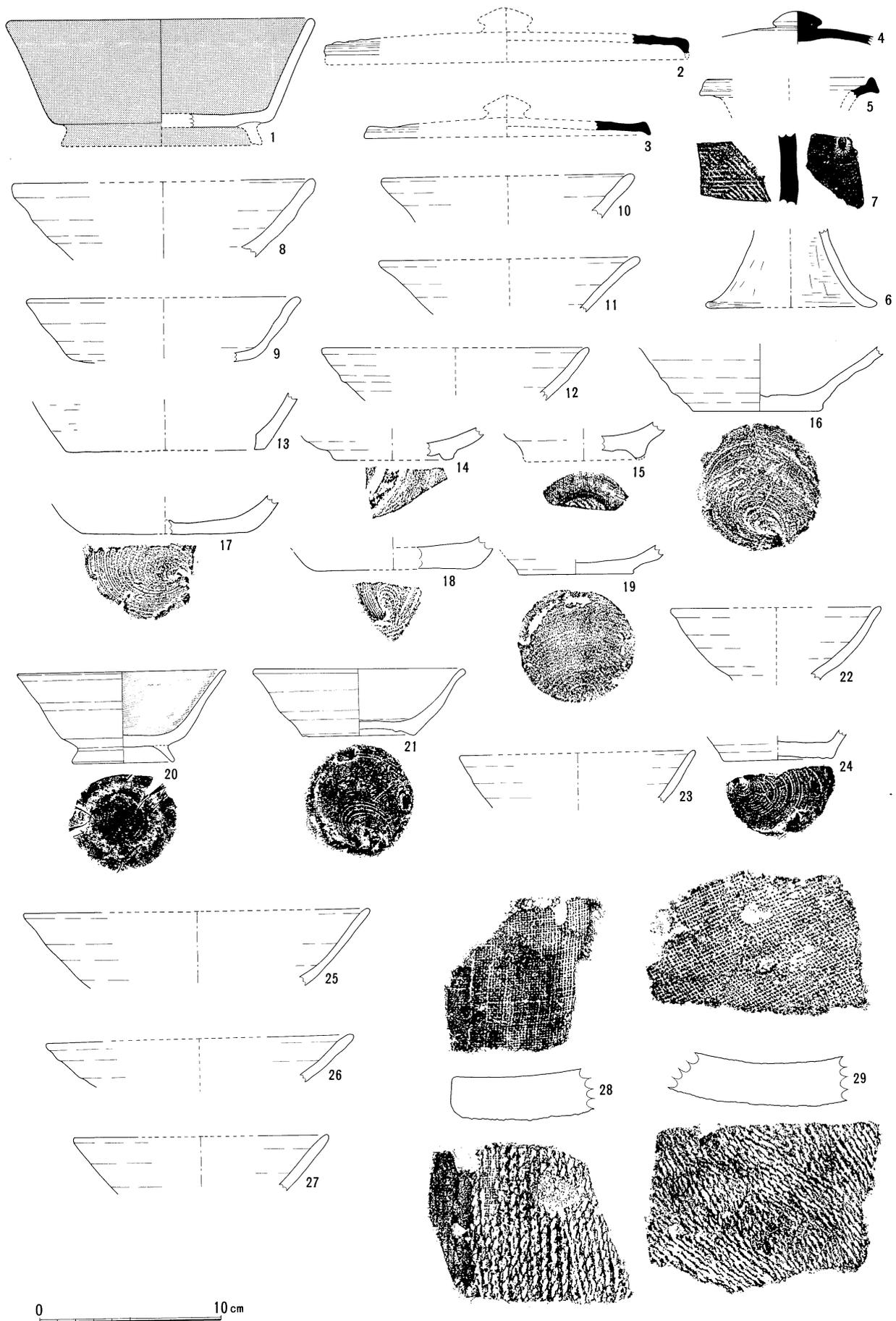
第11図 7、8、9、10、11、12、13、14、15、16号土坑実測図 (その他の水準高22.40m)



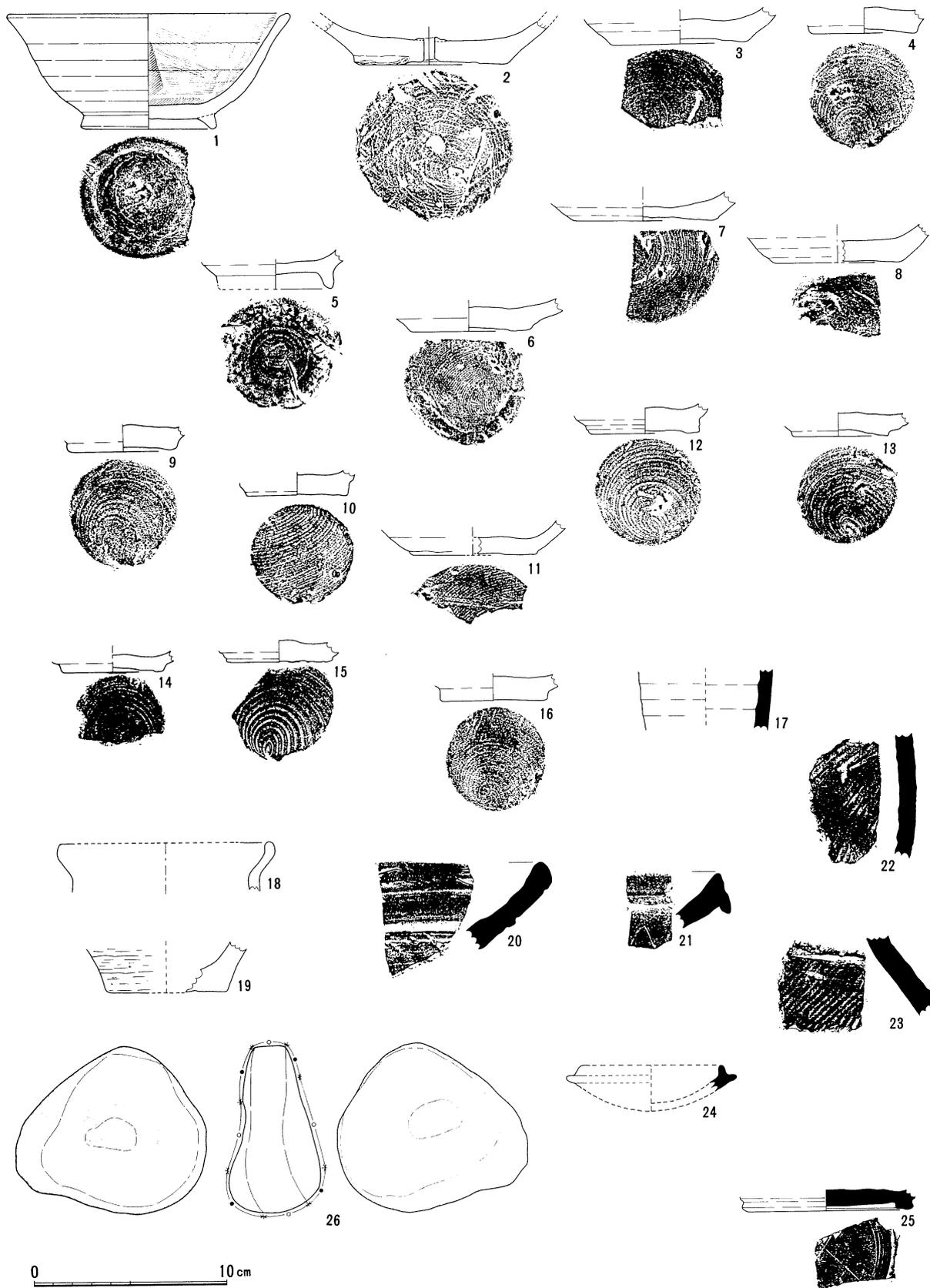
第12図 1、2号掘立柱建物跡実測図 (その他の水準高22.40m)



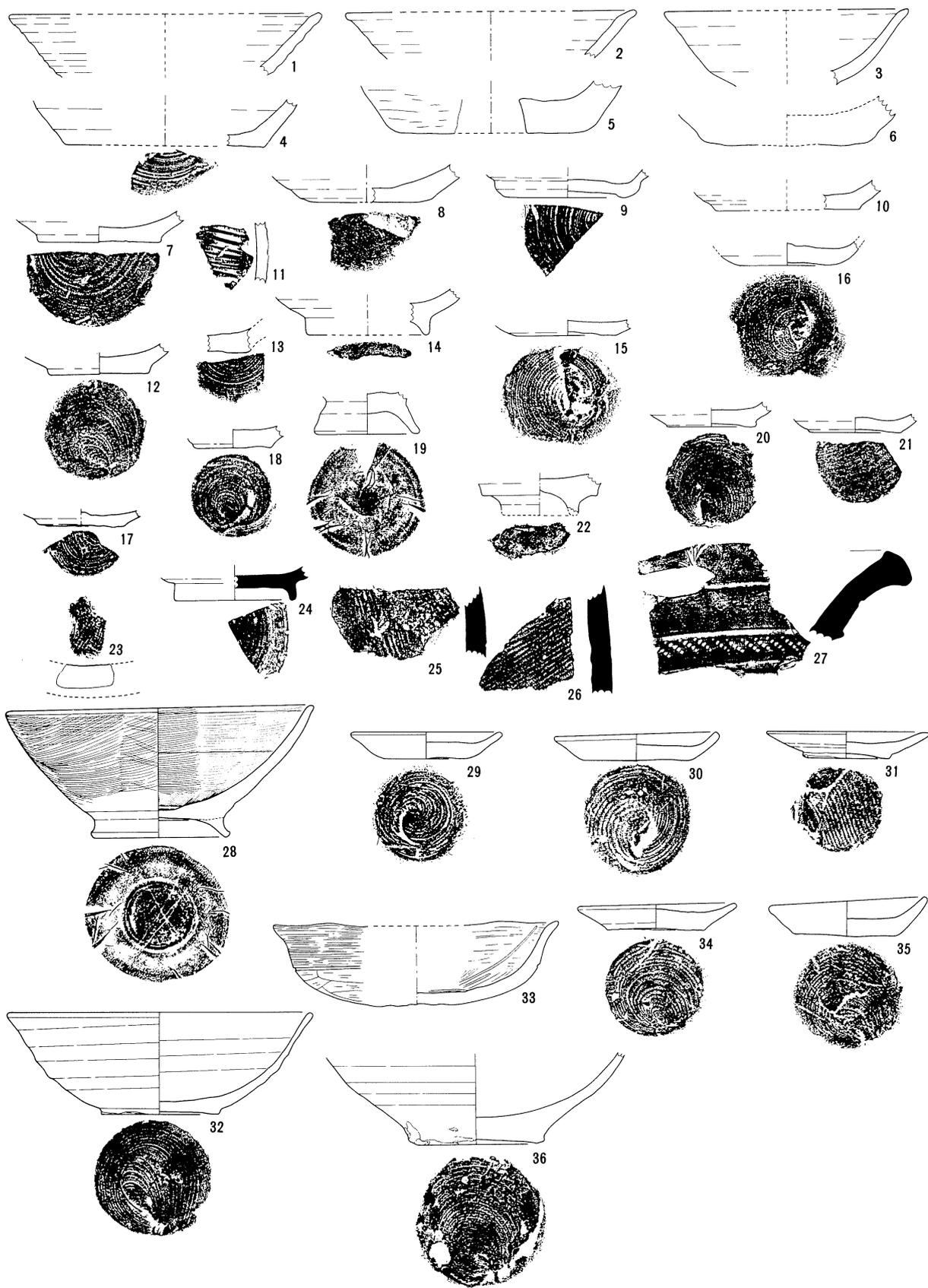
第13图 1、6、7、8、9、15号竖穴住居迹出土遗物实测图



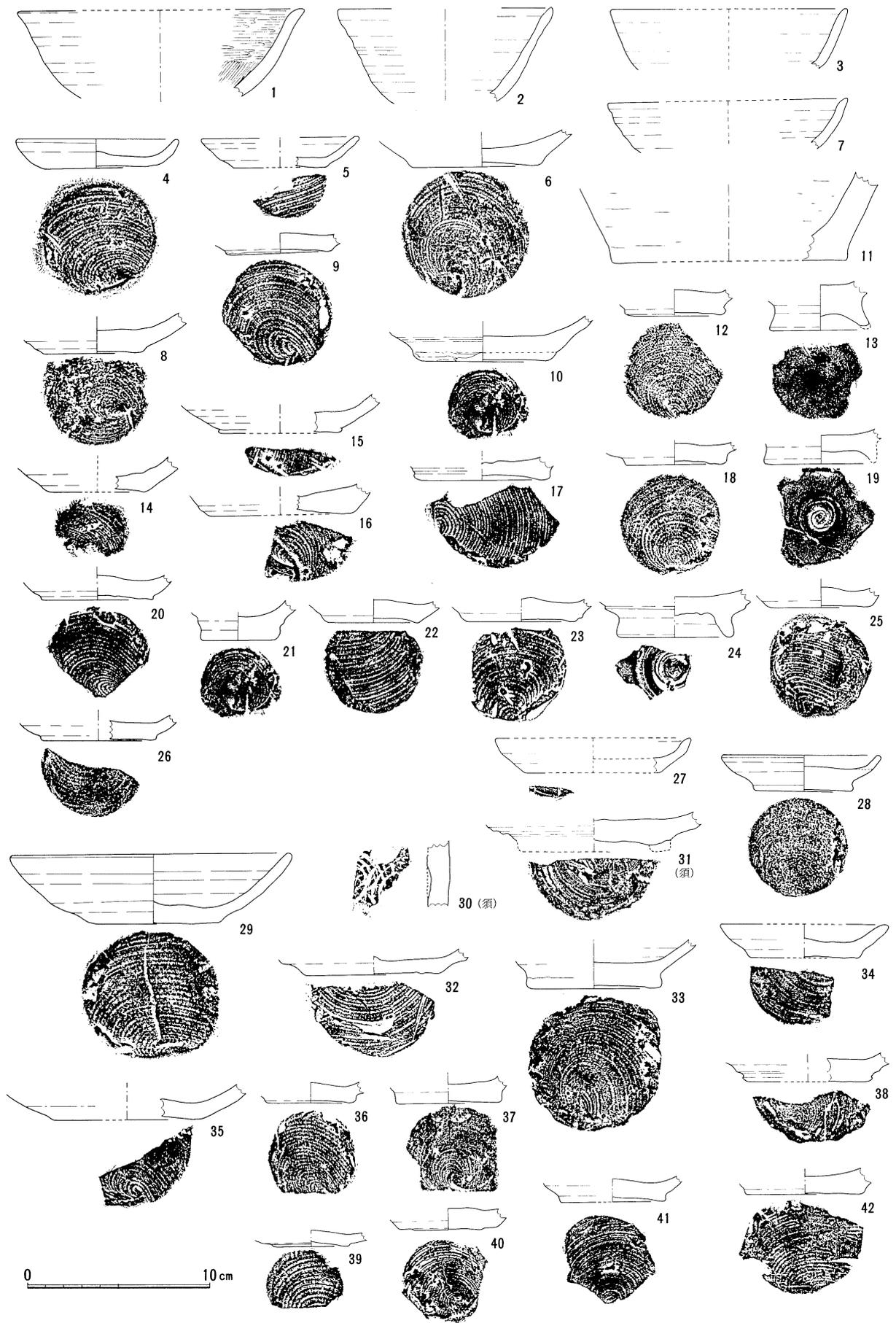
第14图 11、12、13号竖穴住居跡出土遺物実測図



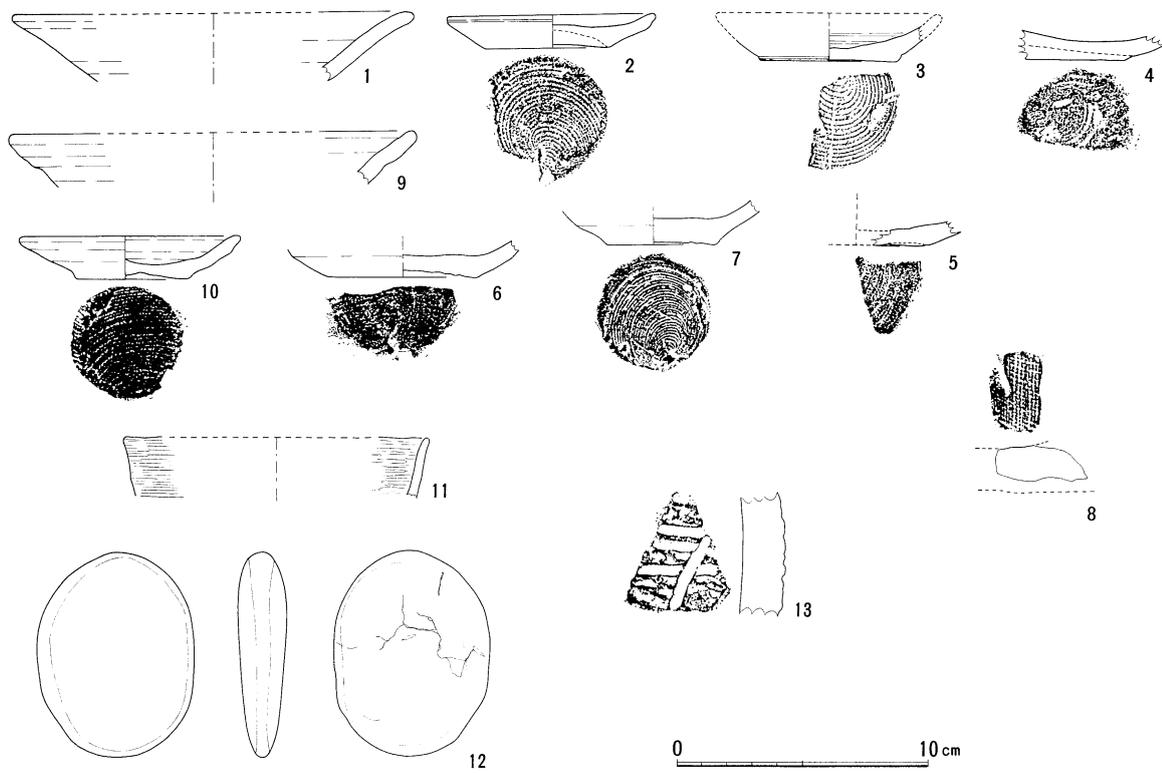
第15图 14、10号竖穴住居跡出土遺物実測図



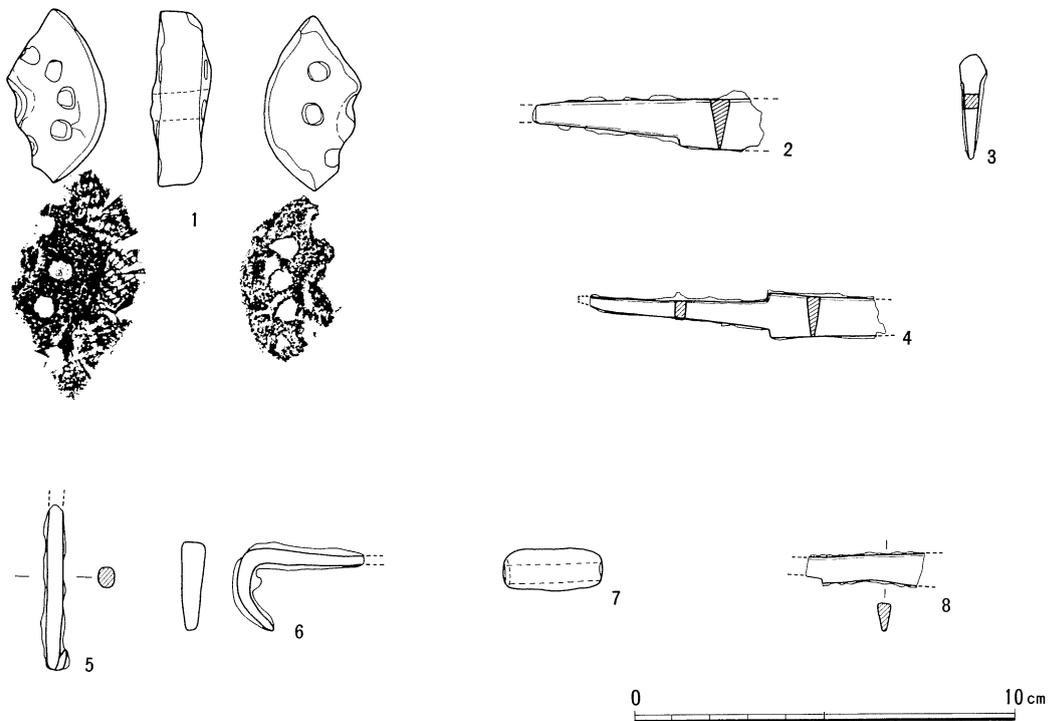
第16图 16号竖穴住居跡出土遺物実測図



第17图 17号竖穴住居跡、11号土坑出土遺物実測図



第18図 1、2、6、10、14号土坑及びその他の出土遺物実測図



第19図 その他の出土遺物、1、2号土坑、10、15号竪穴住居跡出土遺物実測図

3. まとめ

以上のように、今回の調査の結果、竪穴住居跡17軒分、掘立柱建物跡2棟分、土坑16基を検出した。この他に小ピットを調査地区の中央西側で多数検出しているが、建物跡等の一部と考えられるピットは得られなかった。1号から9号の竪穴住居跡は、弥生時代後期から末葉とみられるが、出土遺物が少量でどの時期になるかは不確定要素が多い。遺構は伴わないものの、一部に宮ノ台期の破片と考えられる土器片もみられ(図13-8)、西側に隣接する三嶋台遺跡との関連性も伺える。^(註1)2号は、炉に粘土を使用し特異な状況を呈している。

10、11号竪穴住居跡は、出土遺物から、確定は出来ないものの、11号の図14-1土師器高台付坏は、坊作遺跡401号住居跡出土「大里」墨書土器と成形、調整、胎土、色調が同類とされ、図14-4の凝宝珠形の偏平鈕の須恵器蓋は、東海産と推定され、田所編年の坊作遺跡I-a期(8世紀中葉前後)と考えられる。^(註2)また、10号は、小片が多いが、かえりをもった図15-24小型の須恵器蓋は7世紀代であろうが、高台付の須恵器図15-25の底部片の形体から考えると8世紀第1~2四半期頃と推定される。また、10号はわずかな範囲の調査であるが、両者とも主軸方位が似ていることなどから、かなり近い時期の住居跡の可能性も伺えるのではないか。

12~17号は、平安時代の所産とみられる。12号と13号は切り合っており、13号が12号を切っている。出土した土師器坏、埴類から12号は、田所編年坊作VI期頃(9世紀末葉頃?)、13号は、同じく高台付埴図14-20などから同編年坊作VII期及び笹生編年I-1期(10世紀前半)^(註3)と考えている。14号は土師器高台付埴図15-1や小皿の存在などより笹生編年II-2期(11世紀第1四半期)、15号は、図13-36の土師器坏、小皿などより同編年II-1期頃、16号は、13号を切っており、一部の遺物に流れ込みがみられるが、出土した多数の土師器坏・小皿・埴類、特に図16-28内黒高台付埴、図16-32土師器坏、完形にちかい小皿類などから同編年II-2期11世紀第1四半期とみられる。17号も、図17-4、17-5、17-28、17-34の小皿類や図17-29(覆土上部)の坏などからII-2期(11世紀第1四半世紀頃)と考えている。また、14号と17号は、竪穴の形体や主軸方位も極似している。さらに、16号は、炉の存在や竪穴の平面形体等が特異である。出土遺物では、総じて鉄滓や軽石が検出されている。これらの点より、他の住居跡と比較すると特別な住居跡と考えざるをえない。

2棟の掘立柱建物跡は、各々の主軸方位が似ているが、柱穴の掘り方や位置的にみて同時期とは考えにくく、2棟として扱っている。しかし、掘り方や覆土、方向性などから奈良~平安時代の所産としてみている。竪穴住居跡との新旧については、不確実な点が多い。

土坑では、2(P6)でふれているように幾つかの形体的特徴がみられるが、15号以外はすべて墓壇とみられる。特に1号と2号から刀子片が出土していることが注目される。また、6基の土坑より伴出土器がみられる。さらに、2号は14号住居跡を切っている。1号、2号、6号の小皿類などから11世紀前後の年代が考えられる。したがって、各住居跡との切り合い関係などより10世紀前半から11世紀前後のやや広い年代が想定され、各土坑によって年代の違いが伺える。

この他には、遺構は検出されていないが縄文時代後期堀ノ内式期の土器片や凹石、弥生時代後期とみられる土製紡錘車片が出土している。^(註4)また、白磁片(碗)も3点ほど検出している。

今回の第2次調査でも、郡家推定地としての郡本遺跡の性格を確定することは出来なかったが、2

棟の掘立柱建物跡や奈良～平安時代の竪穴住居跡、墓壇などの検出は、当遺跡の特殊性、重要性がよりいっそう強まったことを暗示している。今後は昭和61年の第1次に調査した成果（下図第20図他）、及び千葉県文化財センターの調査成果、更には、上総国府推定地として確認調査が行なわれている古甲遺跡の成果などを含めて、広範囲にみつめたよりいっそうの発掘調査が望まれるものである。

註1. 「口絵人面土器解説」須田勉 『古代59・60合併号』早稲田大学考古学会

2. 田所真氏のご教示による。

「II上総国 1. 市原市坊作遺跡」田所真 『房総における歴史的土器の研究』1987、房総歴史考古学研究会

3. 「房総における中世土器様相の成立過程」笹生衛 1989、史館第21号

4. 忍澤成視、大村直氏ご教示。

その他の参考文献

1. 「シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器」1983、史館同人他

2. 「2. 市原市稲荷台遺跡」浅利幸一 上記註2の文献に同じ

3. 「市原市文作遺跡」大村直 1988、(勸)市原市文化財センター

4. 「椎津茶ノ木遺跡」木對和紀、1993、(勸)市原市文化財センター

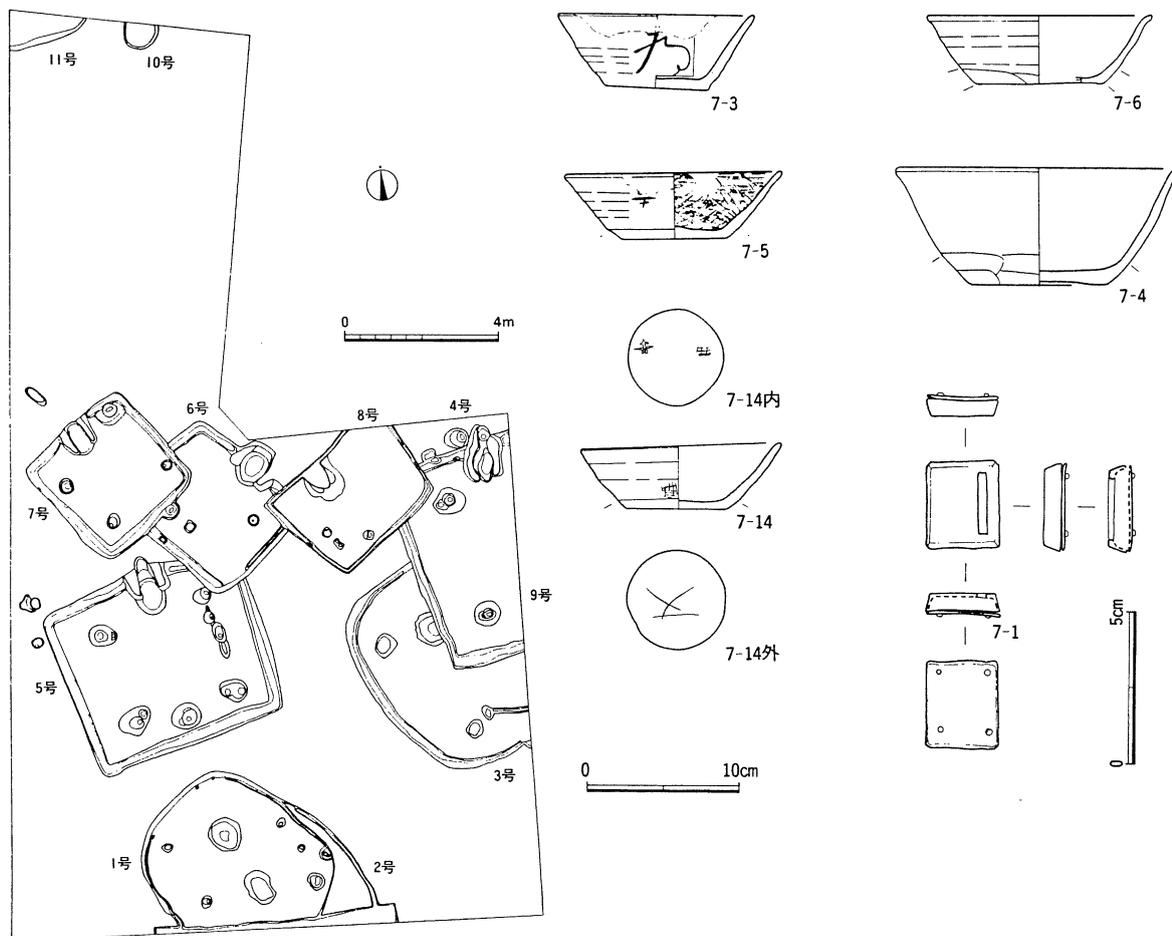
5. 「貿易陶磁－奈良・平安時代の中国陶磁」土橋理子他 1993、奈良県立橿原考古学研究所博物館

6. 「房総の中世土器様相について」笹生衛 1991、史館第23号

7. 「須恵器」小林信一他 1993、『千葉県文化財センター研究紀要14』(勸)千葉県文化財センター

8. 「北総における弥生時代土製紡錘車の評価」柿沼修平 1985、史館第18号

※ なお、今回の調査に際し、現地で、柴田龍司、大谷弘幸、高柳圭一、宮本敬一、近藤敏、高橋康男、木對和紀の各氏にお世話になり、また、当センターの田所真氏には、多数の御教示をいただいた。記して感謝したい。



第20図 昭和61年調査(第1次)全体図及び7号の主な出土遺物 調査報告書(木對1987)より抜粋

写真図版



調査風景（南側より）



調査風景（北側より）

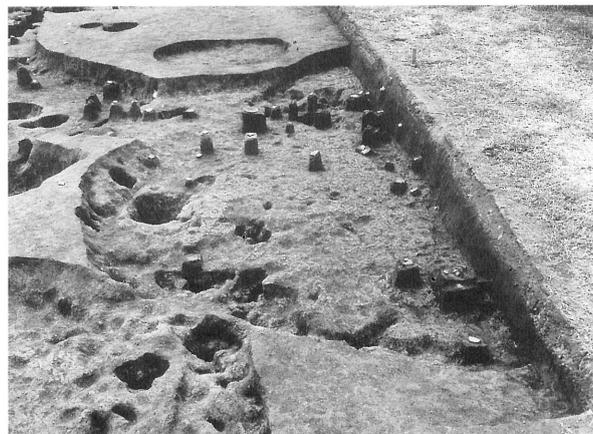
調査前の状況
(南側より)



同上
(北側より)



郡本八幡神社参道前の大石



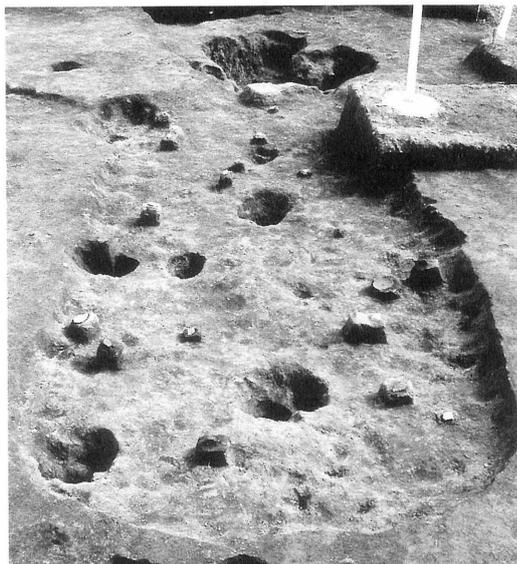
7号竪穴住居跡付近の状況 (北側より)



1号竪穴住居跡 (北側より)

7、17号竪穴住居跡 (南側より)





14号竪穴住居跡（西側より）



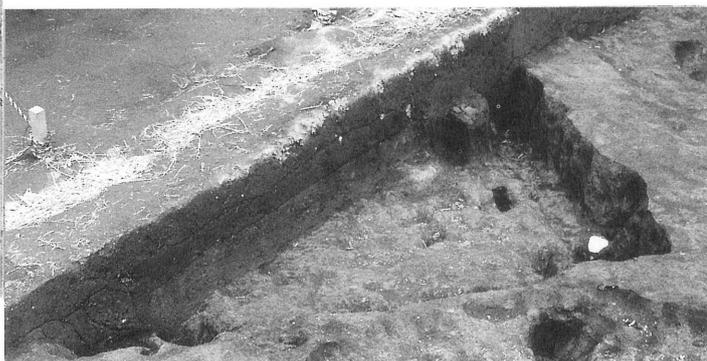
13、16号竪穴住居跡（西側より）



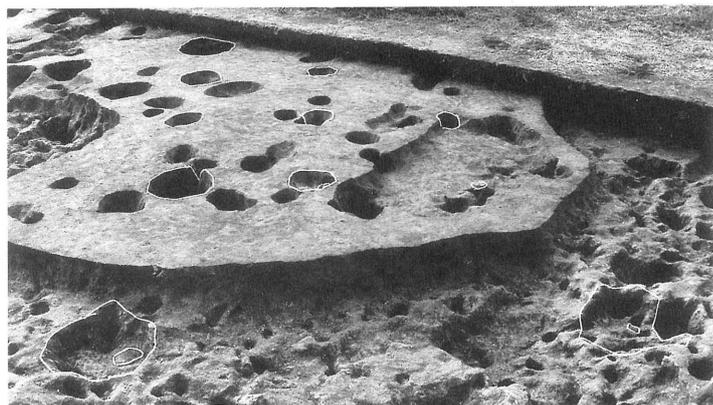
13号竪穴住居跡（南側より）



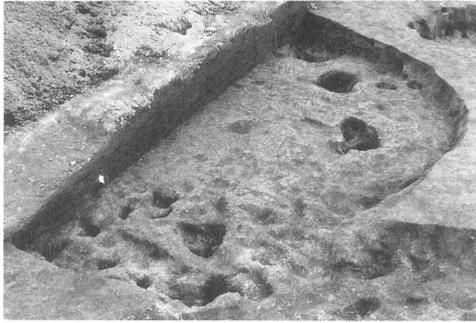
6、13号竪穴住居跡（西側より）



10、15号竪穴住居跡（東側より）



1、2号掘立柱建物跡（東側より）



8号竪穴住居跡 (西側より)

16号竪穴住居跡 (北側より)



17号竪穴住居跡遺物出土状況

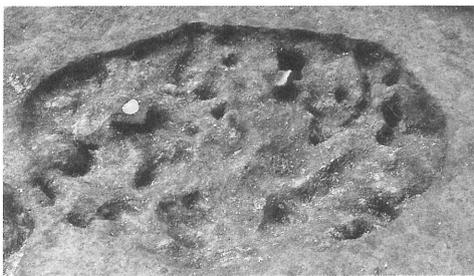


16号竪穴住居跡遺物出土状況 (上、右)



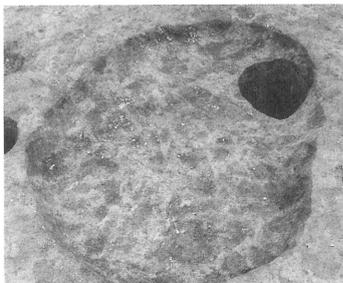
12号竪穴住居跡 (西側より)

11号竪穴住居跡 (西側より)



1号土坑

2号土坑



5号土坑



6号土坑



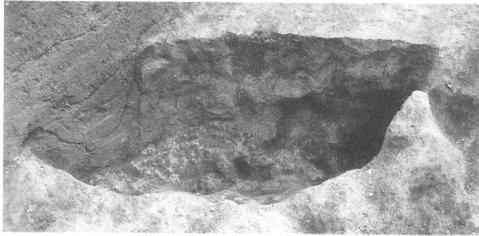
7号土坑



9号土坑



11号土坑



15号土坑



2号炉跡の様子



14号土坑



13-1



13-3



13-4



13-12



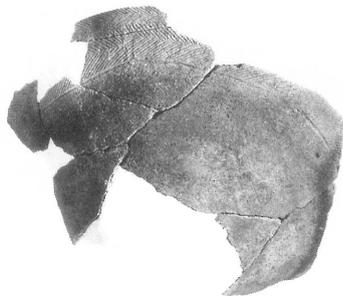
13-11



13-10



13-9



13-15



13-16



13-18



13-33



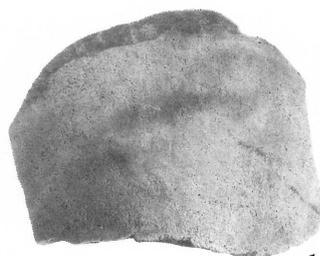
13-22



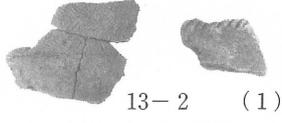
13-32



13-21



13-35



13-2 (1)



13-5



13-7



13-13



13-8

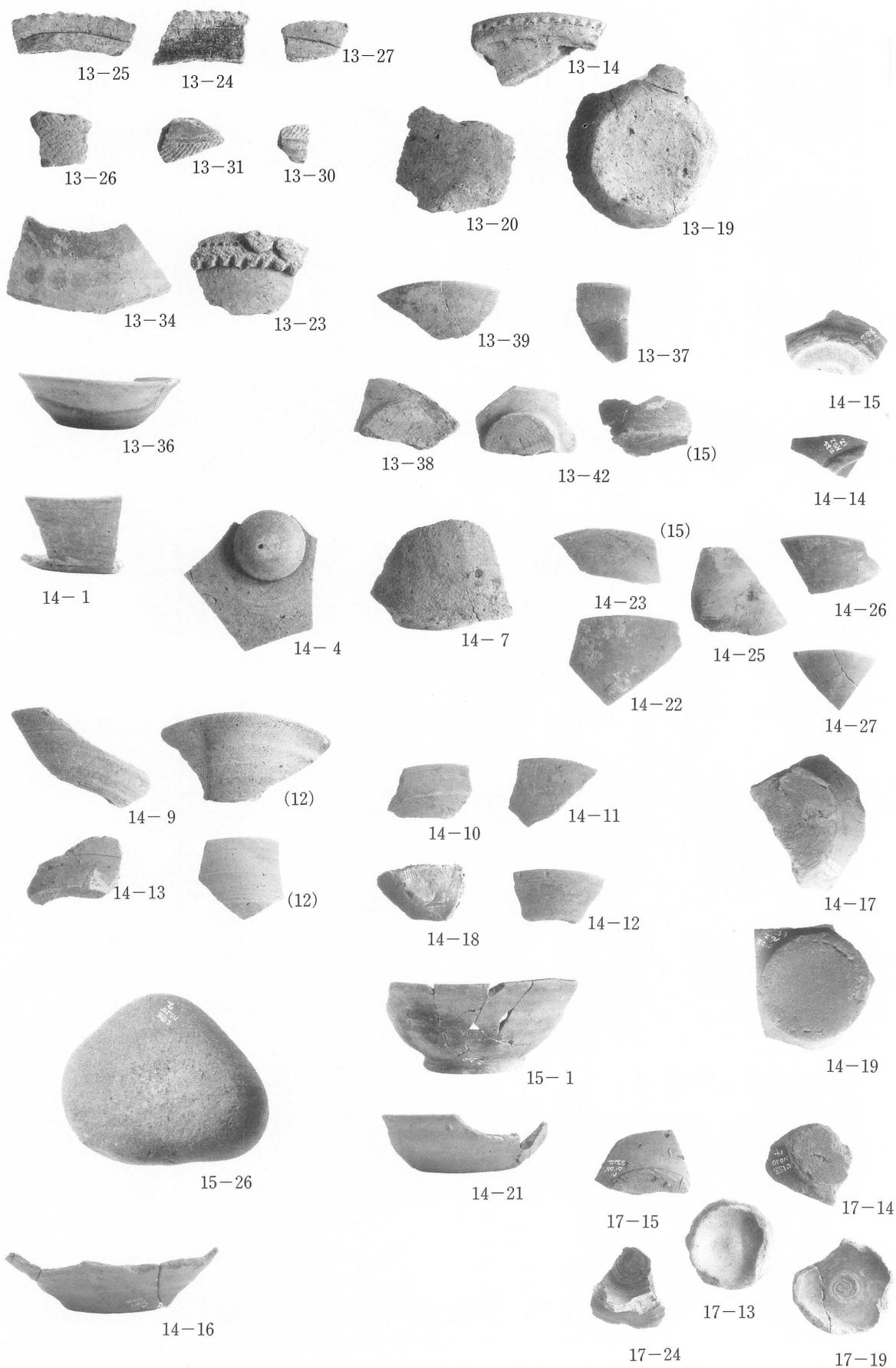


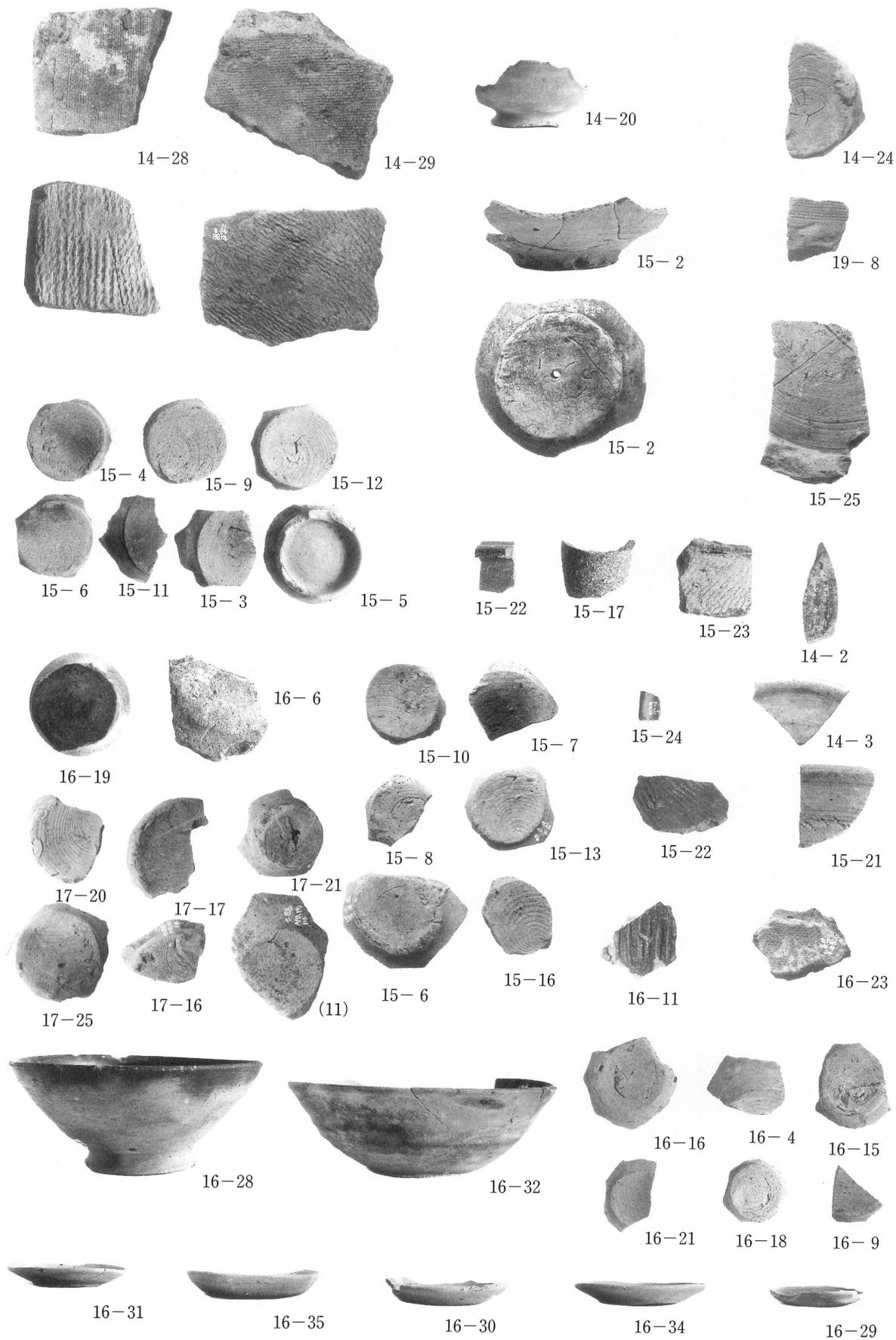
13-28

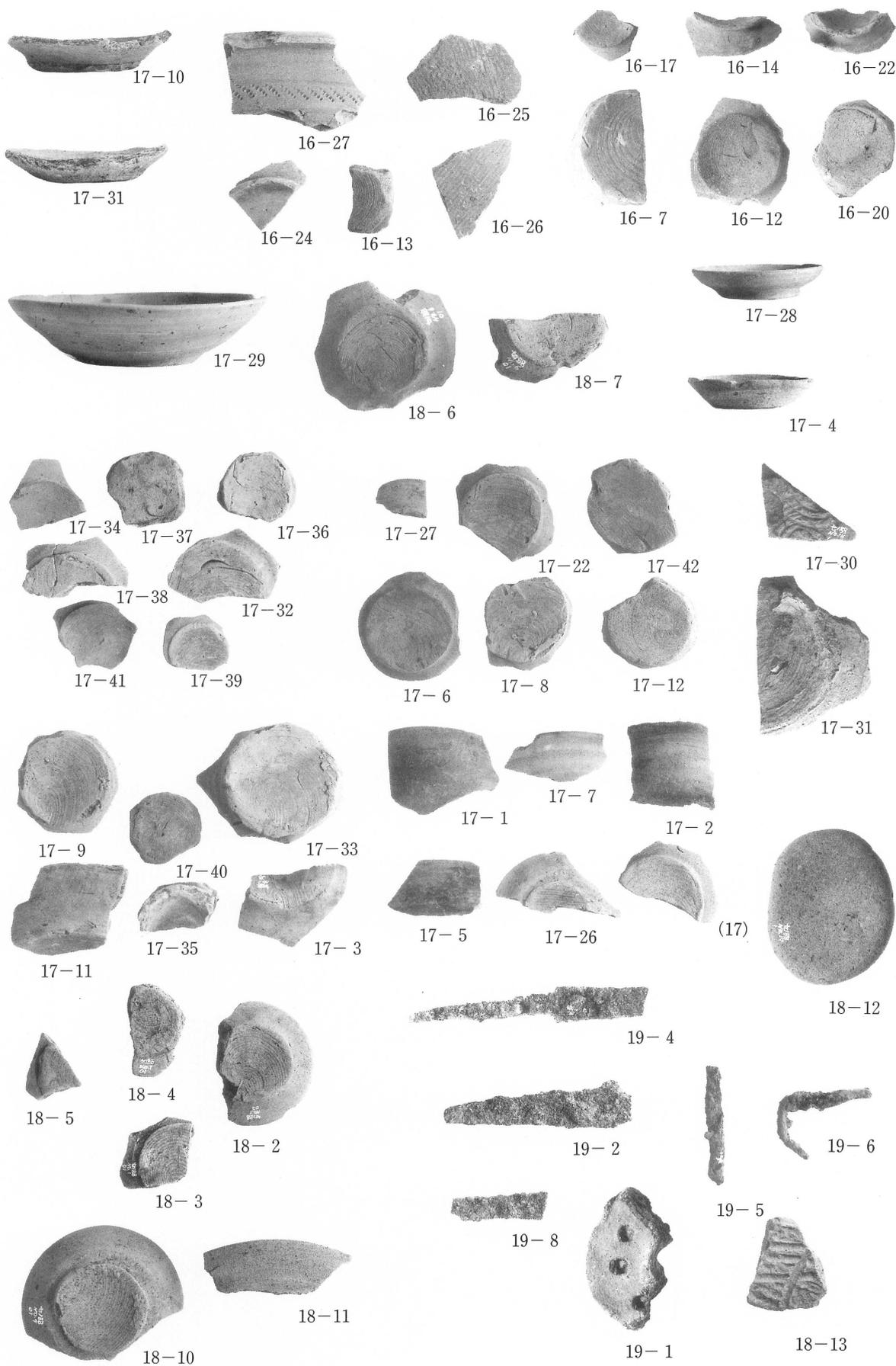


13-29

※遺物番号は
挿図番号と同じ
カッコは住居跡名







報告書抄録

ふりがな	いちほらしこおりもといせきだいにじ							
書名	市原市郡本遺跡 (第2次)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第56集							
編著者名	田中 清美							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290 千葉県市原市能満1489番地				TEL 0436 (41) 9000			
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こおりもといせき 郡本遺跡 (第2次)	千葉県市原市郡本 三丁目202-1	12219	330	35度 30分 29秒	140度 27分 23秒	19940919) 19941104	267.47	電気通信 設備建設 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
こおりもといせき 郡本遺跡 (第2次)	集落跡	弥生時代後期) 平安時代後半	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土壇	17軒 2棟 16基	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、布 目瓦、土製紡錘車、 刀子、鉄滓、軽石な ど		当遺跡は、市原郡家 推定地であるが、今 回の調査では、確定 できる資料は得られ ていない。	

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第56集

市原市郡本遺跡 (第2次)

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月31日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 日本電信電話株式会社
千葉設備建設センター

財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
TEL 0436 (41) 9000

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 0473 (24) 5977